

文部科学省委託事業
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」

表現活動を通じた 日本語支援・バイカルチュラル の資質育成

～大連日本人学校の実践から～



2022年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団

目次

本書刊行にあたって	2
-----------	---

バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成のための日本語指導プログラム開発 ～ 表現活動を通じた日本語支援・バイカルチュラルの資質育成 ～	3
---	---

本校の日本語指導について

大連日本人学校の実態	6
------------	---

大連日本人学校の取組について	9
----------------	---

持続可能な学校体制づくり	11
--------------	----

大連日本人学校の実践

小学部 第1学年 国語科 たのしいな、ことばあそび	14
---------------------------	----

小学部 第2学年 国語科 ことばでみちあない	18
------------------------	----

小学部 第2学年 音楽科 いろいろながっきの音をさがそう	24
------------------------------	----

小学部 第3学年 道徳科 ぼくのおべんとう	28
-----------------------	----

小学部 第4学年 社会科 地震からくらしを守る	34
-------------------------	----

小学部 第4学年 道徳科 『正直』五十円分	40
-----------------------	----

小学部 第5学年 国語科 声に出して楽しもう	46
------------------------	----

小学部 第5学年 図画工作科 カードを使って	50
------------------------	----

小学部 第6学年 算数科 考える力をのばそう～関係に着目して～	56
---------------------------------	----

小学部 第6学年 家庭科 こんだてを工夫して	62
------------------------	----

中学部 ICTで漢字マスター！	66
-----------------	----

小学部 第5学年 外国語活動 端午節について理解を深めよう	70
-------------------------------	----

中学部 第3学年 社会科 第1章 私たちと現代社会第1節 現代社会の特色と私たち	74
--	----

中学部 第1学年～第3学年 特別活動 自他の良さに気づき、周囲とよりよい人間関係を築くためのトレーニング	78
---	----

まとめ	84
-----	----

本書刊行にあたって

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応しうる人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そして、弊財団は2017年に文部科学省より委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施いたしてまいりました。

その中のプロジェクトの1つ「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」では、昨今、日本国内と同様に日本人学校でも増加している国際結婚家庭の子どもなど日本語指導が必要な子どもに対し、日本語を教科横断型で学ぶ学習活動および在籍学級での授業における適切な支援を行うことで、日本人学校での学習に十分に参加できるように、力を伸ばしていくことを目指しました。

この取組は、2017年に台北日本人学校および台中日本人学校を研究提携校として開始し、その成果を活用して2019年より大連日本人学校、青島日本人学校およびマニラ日本人学校にて、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのより汎用性の高いプログラムの開発を進めたものです。その実践につきましては、AG5の成果発信サイト（<https://www.ag-5.jp/>）におきましてもお伝えしているところでありますが、この成果を海外子女・帰国子女教育に関わる多くの方々に広くご活用いただくため、今般、大連日本人学校にて開発した学習活動案をまとめた本書を刊行するはこびとなりました。

ここに、本研究開発にご尽力いただきました佐藤委員長をはじめとするAG5運営指導委員・研究員の皆様ならびにご協力いただきました学校関係者、児童生徒およびその保護者の皆様等すべての方々に対し、あらためまして厚く御礼申し上げる次第でございます。

本書が日本語指導に携わる皆様にとりまして、学習言語としての日本語を子ども達が効果的に学ぶための手立てを考える一冊となり、今後の海外子女・帰国子女教育およびグローバル教育に加え、日本国内の外国人児童生徒等の教育の発展にお役立ていただけたら、本事業の実施者として、これに勝る喜びはありません。

本事業は本年度で終了となりますが、弊財団では引き続き、本事業を通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいります。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2022年2月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
理事長 綿引 宏行

バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成のための日本語指導プログラム開発
～ 表現活動を通じた日本語支援・バイカルチュラルの資質育成 ～

「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」では、8つの研究テーマがあります。本冊子で紹介する内容は、テーマ2「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」における大連日本人学校の研究実践です。

テーマ2は、2017～2018年度台北日本人学校・台中日本人学校・高雄日本人学校において、主としてバイリンガル・バイカルチュラルな観点を取り入れた日本語指導のプログラム開発、教員研修のプログラム開発に取り組みました。この成果を引き継ぎ、2019年度からマニラ日本人学校・大連日本人学校・青島日本人学校が、それぞれの学校の特色を生かしながら、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語指導プログラム開発、教員研修プログラム開発を進めてきました。本年度は事業の最終年度であり、その成果を3校が協力して「汎用性のある日本語力向上プログラム（以下、プログラムという）」としてまとめました。この詳細につきましては、AG5 WEB サイトに動画やリーフレットとして紹介しています。

本冊子は、そのプログラム開発に至るまでの大連日本人学校の貴重な実践の成果をまとめています。大連日本人学校には、日本語学級は設置されていません。在籍学級担任や教科担任が、子どもたちの日本語力やよさを把握して、在籍学級の授業で日本語支援をしました。その軸となっているのが、「表現活動」を重視した授業づくりです。日本語力が十分でなくても、「表現活動」に必要な日本語支援があれば、子どもたちは授業に参加できるのです。その際、バイカルチュラル人材としての成長が期待される子どもたちの資質育成に目を向けることで、授業はよりいっそう魅力的なものになります。例えば、中国や大連ならではの情報や体験を取り入れたり、交流活動を積極的に行ったりすることによって、日本語力が十分でなくても活躍できる機会が増え、子どもの達成感や自己肯定感を高めることができます。また、それが他の子どもたちにとっても、多様な価値観や考え方に触れるチャンスにもなるのです。

大連日本人学校では、このような授業づくりを進めるために、日本語支援のコーディネーターを学校組織に位置付け、校内研修とも関連づけながら全教員で取り組む体制を築きました。日本語学級が設置されていない日本人学校が多い現状において、大連日本人学校の取り組みは示唆に富むものではないでしょうか。

本冊子では、実践事例を「表現活動を中心にした在籍学級における日本語支援」、「家庭と連携した言葉を広げる活動」、「バイカルチュラルの資質の育成」に分けて紹介しています。各実践事例には、日本語支援やバイカルチュラルの視点から、在籍学級でできる授業づくりのポイントを示しています。これらをヒントにして、各地の日本人学校でそれぞれの特色を生かしながら、新たな実践に取り組んでいただければ幸いです。

AG5 運営指導委員・目白大学専任講師
近 田 由 紀 子



大連日本人学校の
日本語指導について

大連日本人学校の実態

1 大連日本人学校の概要と強みと課題

本校は、小学部 68 名、中学部 22 名、全校児童生徒で 90 名（2021 年 12 月 24 日現在）が在籍する日本人学校です。本校は、国際結婚の家庭が多く、日本語も中国語も高度なレベルで理解している児童生徒の割合が非常に高いという実態があります。

また、どの学年にも学習規律が定着しており、落ち着いた学習環境の中で教育活動を行っています。さらに、全校中に互いに認め合い、支え合う支援的な雰囲気があふれていることが、本校の特徴です。

そのような中、ここ数年間で、中国語を母語としており、日本語の力に課題がある児童生徒の入学・編入学が多くなってきました。それは、バイリンガル・バイカルチュラルとして活躍できる子どもを育てたいという、保護者の願いが一番の理由として挙げられます。日本人学校に対する大きな期待に応えることが、本校の新たな課題と言えます。

6

2 大連日本人学校における「テーマ」の設定

「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（以下、AG5 という）」テーマ 2「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」を達成するために、本校では以下のようにテーマを設定しました。

**「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって
自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」**

本校では、テーマ達成のため、高い日本語能力の習得を目指して、「表現活動」を活動の柱に据えることにしました。語彙力をはじめ、全体的に日本語能力が高い本校の児童生徒にとって、様々な表現活動に取り組むことが、より高度な日本語能力の習得につながると考えたからです。

また、私たちはテーマを達成するために、バイカルチュラルの資質の中で「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」を重視しました。劇的に変化する国際社会の中で良さを発揮するためには、確かな言語能力だけではなく、他者の考えや思いを理解し、受け入れた上で主張できる力が必要だと考えたからです。

他者を受け入れることや自分自身の考えを確立させ主張することの基盤となるのは「自己肯定感」だと思います。また、「自己肯定感」は、近い将来国際結婚家庭の児童生徒たちが直面するかもしれない「揺らぎ」に対する重要な要素です。

さらに、国際社会の中で生涯にわたって良さを発揮するためには、他者を理解し、よりよい人間関係を築く意識やその手立てを学ぶことも重要です。

以上のことから、私たちは実践にあたって「表現活動」を中心に、「自己肯定感」や「コミュニケーション能力」などの「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」に着目することにしました。

3 実態の把握について

①「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」

AG5 の取組が始まった 2019 年度、本校では日本語能力を把握するため全児童生徒を対象に「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施しました。

その結果は、小学部 1 年生は 85%以上、小学部 2～4 年生は 95%を超える正答率となりました。また、小学部 5～6 年生及び中学部 1～3 年生では、ほぼ 100%に近い正答率となりました。

以上の結果から、本校の日本語の語彙を理解する力は非常に高いということがわかりました。

2020 年度及び 2021 年度は 4 月に入学した小学部 1 学年のみ「語彙チェック」を実施しました。平均正答率が 80%を超えるなど、全体的には 2019 年度と同様に語彙を理解する力が高いことがわかりました。

また一方で、国際結婚家庭の児童数名の日本語能力に課題があることを確認できました。

②「JSL 評価参照枠」と『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部（目標項目）

文部科学省が作成した「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」の中には、子どもの日本語の力を段階分けした「JSL 評価参照枠」があります。本校では、この評価参照枠とそれをもとにした『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部（以下「目標項目」）を活用し、本校の実態を把握・共有しようと試みました。

※【JSL 評価参照枠】及び「目標項目」参照

『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料』の一部（大連日本人学校の「目標項目（一部）」）
https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/dairen2020_siryo1.pdf



『「文部科学省日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」作成の参考資料「学習目標例」』
<https://data.casta-net.mext.go.jp/kyouzai/mext/shidou/mokuhyou-rei-syoki.pdf>



各担任を中心に、それぞれの学年(学級)の実態について、「目標項目」の四つの観点(話す・読む・書く・聴く)をもとに協議しました。その結果、小学部の低学年では第4～第5ステージの項目に課題が集中しており、学年が上がるにつれて徐々に第6ステージの項目の課題が多くなっていくことがわかりました。

さらに、中学部のほとんどの生徒は第6ステージを達成できていると判断できました。小学部における効果的な教育実践の成果により、土台となる日本語能力がしっかり構築されているためだと考えられます。

③ 個別の指導計画

「目標項目」は学年(学級)の実態を把握し、共有する手立てとして非常に有効でした。しかし一方で、「目標項目」では日本語の力に課題のある児童生徒一人一人の実態を詳細に説明することが難しく、教員間で共有するには適さないことがわかりました。

そこで、日本語の力の側面から配慮を要する児童生徒について、個別の指導計画を作成し、交流に活用しようと考えました。それぞれの子どもの特性(強み・課題)について教員間の共通理解を図るとともに、より効果的な指導・支援に役立てています。

学年 児童名 (イニシャル)		(児童の実態・障害の状況) ・日本語の読み書き、読解に課題がある。(中国語と混同してしまう)	
長期目標		(学習) 日本語の読み書き・読解が確実にできるようにする (生活)	検査結果等(日付)
	短 期 目 標	指導の手立て・留意点	評 価
一 学 期	(学習) ○小学校で学ぶ漢字の読み書きに取り組み、中国語と区別をしっかりとつけつつ、確実に身につけるようにする。	○ロイロノートを活用しての個別指導 ○授業中のこまめな指導 ○生活ノートを活用して、意識を高める	○学習において、大きな改善が見られる。努力が成果となっていることで、本人の意欲・自信につながっている。 ○読解に時間を要するため、テストなどでは自分や保護者が思うほどの結果につながっていない。読解のスピードアップが次の課題である。
	(生活) ○	○	○
二 学 期	(学習) ○中学校で学ぶ漢字の読み書きに取り組み、確実に身につけるようにする。また、読書や書取りにより、読解のスピードアップに取り組む。	○	
三 学 期	(生活)		

個別の指導計画

大連日本人学校の取組について

1 「表現活動」を重視した授業づくり

「語彙チェック」の結果や「目標項目」を活用した考察から、本校の児童生徒は全体的に日本語能力が高いと判断することができました。そこで、本校では「目標項目」を活用してそれぞれの学年・発達段階に応じて課題を捉え、「表現活動」の充実を図り、日本語のより確かな定着を目指すことにしました。

また、表現活動を通して、他者の考えや思いを受け入れた上で、自分の考えを深め、しっかりと主張していく力を身につけさせることができ、バイカルチュラルの資質育成につながっていくと考えました。

したがって、全教員で表現活動を重視した授業づくりに取り組むことにしました。

2 在籍学級における日本語支援（言葉を広げる活動）

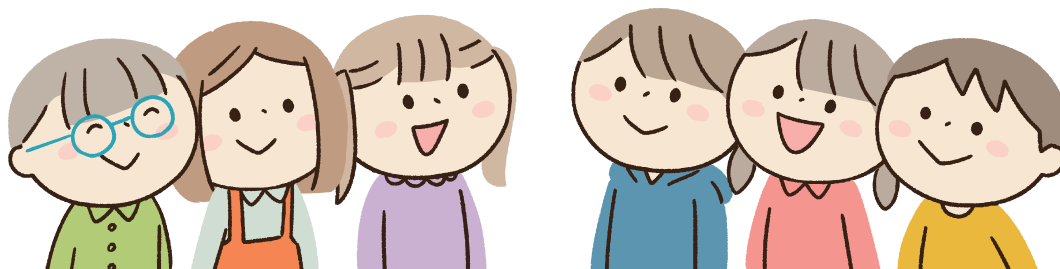
日本語支援の手立て

- ①教え合い・認め合い
（支援的風土を生かす）
- ②言葉を広げる活動
（実感を伴う理解）
- ③視覚的アプローチ
（思考の視覚化・資料の提示）
- ④モデル文の提示
（表現活動につながる）
- ⑤ICTの活用
（iPad・ロイロノート）

本校では、国際結婚の家庭から中国語を母語とする児童生徒の入学・編入学が増えてきました。現在、日本語の側面から配慮が必要な児童生徒は、どの学年（学級）にもそれぞれ数名程度在籍しています。

しかし、本校には日本語学級の仕組みがなく、現体制では人員的にも時間的にも、取り出して個別の指導をすることは困難です。

したがって、表現活動を中心とした授業実践の中で、本校の強みである「支援的風土」を最大限生かし、在籍学級における日本語支援に力を入れたいと考えました。また、具体的な支援策として、以下の五点の手立てに取り組むこととしました。



3 自己肯定感を基盤に違いを受け入れ、 自己の良さを発揮する「バイカルチュラルの資質育成」

多様な価値観があふれ激変する国際社会の中で、子どもたちが良さを発揮していくために、バイカルチュラルの資質として「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」を重視しています。

また、その資質育成のために、基盤となる「自己肯定感」を高めることや、これから出会う新しい環境・新しい人間関係で良さを発揮していくための「コミュニケーションスキル・ソーシャルスキル」を身につけさせることが、重要であると考えました。

さらに、本校の認め合える雰囲気を生かして、日本と中国の差異や共通点を探る授業実践に取り組み、資質の育成を図りたいと考えました。中国に住み日本との違いを身近に感じられる環境は本校の強みであり、特に国際結婚家庭の児童生徒の経験など、バイカルチュラルの資質育成につながる教育的資産として活用できます。加えて、この取組によって国際結婚家庭の児童生徒の自己肯定感を育むことも期待できます。

最後に、様々な交流に取り組むことで、表現活動の中で培ってきた資質・能力を実際に活用し、より確かな定着を目指したいと考えました。

したがって、バイカルチュラルの資質育成のため、以下の三点に取り組むことにしました。

バイカルチュラルの資質育成

- ①コミュニケーションスキル・ソーシャルスキルなど各種トレーニング
(自他の良さに気づき、自己肯定感を育む、よりよい人間関係構築)
- ②日本と中国の差異や共通点を探る授業実践 (認め合える雰囲気の中で)
- ③現地校・他地域の学校・在大連の企業などとの交流
(培った資質・能力を実際に活用する場面)

在籍学級での日本語支援

「表現活動」の重視 ◆日本語の確かな定着をめざす

教え合い・認め合い
(支援的風土を生かす)

「言葉を広げる活動」
(実感を伴う理解)

視覚的アプローチ
(思考の視覚化
・資料の提示)

モデル文の提示
(表現活動につながる)

ICTの活用
(iPad・ロイロノート)

バイカルチュラルの資質 を育成する実践

違いを受け入れた上で 考えや思いを主張する力 ◆国際社会の中で生きる自己肯定感

日中の差異や共通点を探る授業実践
(認め合える雰囲気の中で)

コミュニケーションスキル
ソーシャルスキルの育成
(自己肯定感を育む)
(よりよい人間関係の構築)

現地校・他地域の学校
・在大連の企業など
との交流
(培った資質・能力を
実際に活用する場面)

持続可能な学校体制づくり

(課題・実践の共有を目指して)

1 9年間を見通した日本語指導

本校がAG5のプロジェクトに取り組み始めた当初、児童生徒の日本語の力の捉え方に、教員の間でばらつきが見られました。それぞれの経験に基づいた主観で学級や個人の実態を捉えてしまったためだと考えられます。

そこで、私たちは「共通のものさし」を使って、共通理解を図ろうと考えました。

まずは、「DLA〈はじめの一步〉」の「語彙チェック」を実施し、本校の児童生徒の日本語の語彙力が高いことを改めて認識しました。

次に、私たちは「JSL 評価参照枠」と「目標項目」を用いて、各学年(学級)の実態・発達段階の交流を行いました。そのことにより、小学部の教育実践の中で着実に日本語の力をつけていること、6年間の中で確実に第6ステージまで達成していること、中学部の3年間ではその力を土台にさらに高度な日本語能力を育てていく必要があることを共通理解することができました。また、表現活動を教育実践の中心の柱に据えた上で、小学部低学年～中学年にかけては日本語支援に重点を置き、学年が上がるにつれてバイカルチュラルの資質育成を充実させていくという、本校の9年間の教育実践について構造図にまとめることができました。 ※「構造図」参照

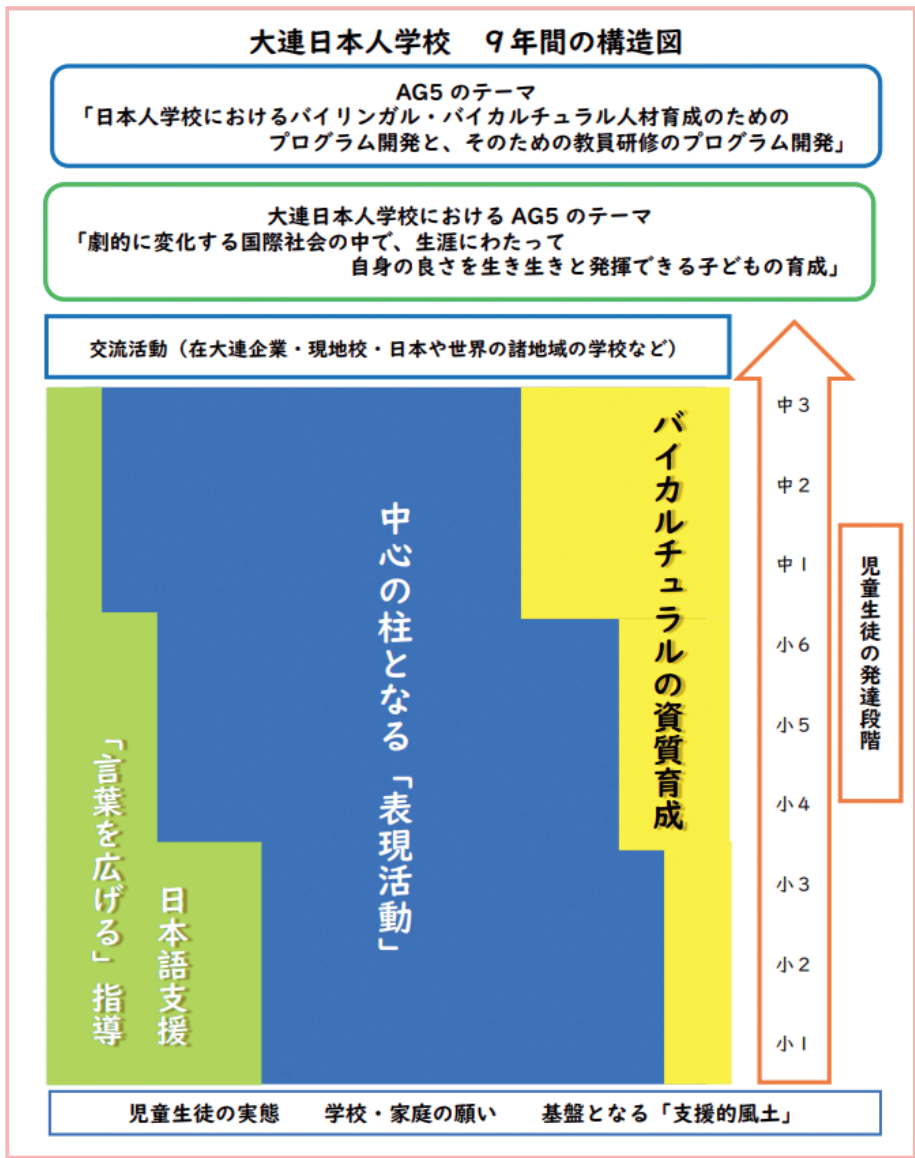
2 校内研修との連携

2020年度、本校では校内主題研究とAG5の活動を関連付けてプロジェクトに取り組みました。しかし、新型コロナウイルスの影響により、管理職を含む約半数の教員が半年間赴任できないことに加え、臨時休校・オンライン授業の期間が長引き、校内研修自体の実施が困難でした。

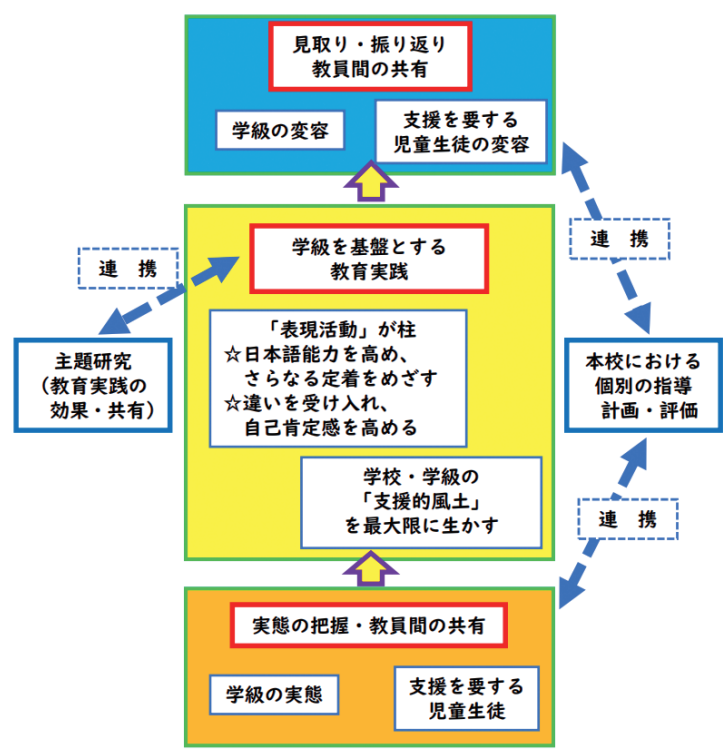
そのような状況下で、AG5担当が「コーディネーター」として、児童生徒の実態交流やそれぞれの教員の実践などの情報集約を行い、交流の要として一定の成果を上げることができました。

2020年度の半ばには全教員が赴任し、児童生徒が登校できるようになりました。さらに、今年度はこれまで通りの活動ができるようになったため、研究推進委員会などを活用し、AG5の取組と校内主題研究の連携の強化に努めました。また、校内主題研究での研究授業・協議と関連付けて行い、より効果的な実践を創り上げることを目指しました。

校内研修との連携を図ることにより、持続可能で効果のある教育実践を推進することができると私たちは考えています。



9年間の構造図



主題研究との連携

大連日本人学校の
実践

小学部
第1学年
国語科表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援
たのしいな、ことばあそび

授業者 ● 梅垣 美里

1 単元目標

- (1) 音節と文字との関係に気付いている。—— **知識・技能**
- (2) 身近なことを表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしている。—— **知識・技能**
- (3) 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付いている。—— **知識・技能**
- (4) 語句と音節と文字の関係に積極的に関心を持ち、今までの学習を生かして言葉を
集めようとしている。—— **主体的に学習に取り組む態度**

2 目標項目との関連

「話す」ステージ3（教科につながる初歩な学習）

c「学校生活や学習場面で必要となる要求表現等を、簡単な日本語で伝える」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子5名、女子6名の合計11名である。国際結婚家庭の児童が6名と、中国にルーツを持つ児童が多数を占めている。

朝教室に入ってくるときは元気よく「おはようございます！」と言え、身体を動かすことや外遊びも好きな児童が多い。また学習に対する意欲も非常に高い児童が多い一方で、特別支援を要する児童、また、日本語を話す、聞くことに課題が多い児童も存在する。

特に国際結婚家庭の児童を目標項目で見ると、1 初期指導（前期）cに相当する児童（自己紹介と「トイレに行きたいです」ということができる程度、沈黙期）が1名、2 初期指導（後期）cに相当する児童が3名、3 教科につながる初歩的な学習bが

2名という実態があり、一方で日本語能力には十分な児童が半数ほど学級内にいる、日本語能力に大きな差がある現状である。

4 単元について

本単元は、今後ひらがなを本格的に学習していく児童たちの、語彙を広げる導入にあたるものである。「新しい言葉を知るとは楽しいな」と、「学ぶことは楽しい」と実感をできるように工夫したい。

まずは語彙力アップに力を入れるようにした。ひらがな練習の教材と、本時の学習を組み合わせる中で、絵カードや文カードをもちいてチャンツのように言葉の反復練習をしたり、出てきた言葉の中で「それはなに？」と疑問を持った児童に対しては、ICT 機器を活用し写真を見せたりするなど、母語と日本語を繋ぐ手立てをしていきたい。

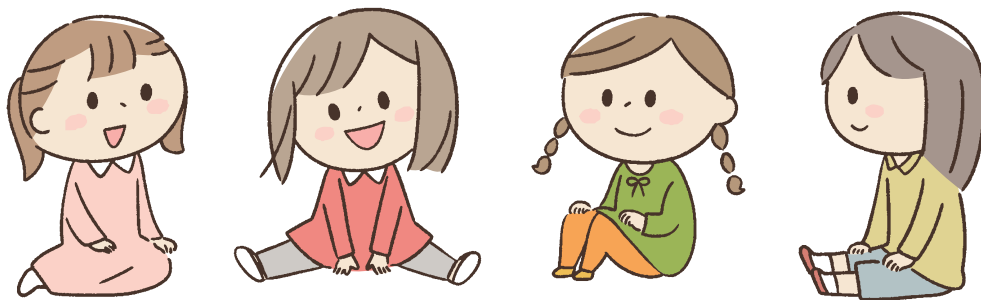
ことばあつめをしていくときには、特殊音節を動作化しながら、練習していく。「教室の中で探そう」など動いていい場面を作り、特別支援を要する子どもたちや学級全体が飽きない工夫をしつつ、発言を認めていきながら、温かい雰囲気の中で学習を進めたい。

5 日本語支援について

実態を踏まえ、日本語能力に課題がある児童に対して2つの手立てを考えた。

1つ目は、語彙力の向上を目指し、「絵カード」を用いた語彙の習得、発音の反復練習である。日本語での生活言語を習得していない児童がいたため、まずは多くの語彙に触れさせるのが効果的であると考え、授業の最初にチャンツのように取り組むことにした。

2つ目は、言葉とイメージを繋ぐ「ICT 機器の活用」である。生活言語を習得していても、学習言語や中国での日常生活ではなじみのない言葉も、学習の中では多く存在する。そのため、「〇〇ってなんですか」という言葉が授業内で多く聞かれた。言葉とイメージを繋ぎ、学習や生活でつかう語彙を増やすためにも、ICT 機器の活用が効果的だと考えた。



6 単元構成

時数	学習活動	ポイント
		○日本語支援の視点 ◆バイカルチャーの視点
第1・2時 対面授業	「ことばあつめをしよう」 ●絵カード、文カード、反対言葉カードなどから1つ選び、チャンツのように反復練習をする。	○日本語での語彙力をアップさせるために、国語の授業の最初に毎時間、反復練習の時間を設定する。
	●教室など身の回りにあるものから、実際に学習するひらがながついていることばを探し交流する。(ことばあつめ)	◆動物・物の名前は、中国語や英語での言い方も交流をする。様々な言語での表現を認め合える風土づくりを意識する。
	●ことばあつめのなかで、子どもたちから出てきた言葉をもとに、言葉遊びをする。	○思いつくものを発表するだけでなく、体を動かしながら、掲示されているものや、学級文庫の本などを手掛かりに言葉集めをさせる。
	●ひらがなプリントで字の練習をする。	○反対から読んだら別の言葉になったり、一つの言葉の中に別の言葉が隠れたりしているものを取り上げる。 ○ICTを使い、姿勢、鉛筆の持ち方、字形が整ってかけている児童の姿やプリントを共有する。

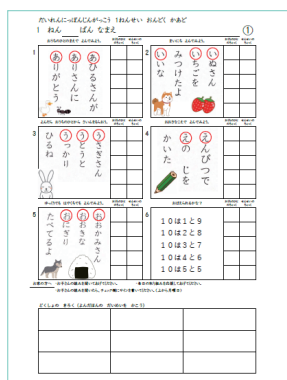
他教科、日常生活への関連

- ・生活言語や学習言語の素地作り（すべての教科につながるもの）

◆バイカルチャーの視点

英語や中国語での言い方を交流することで、同じものを伝えるのに、様々な言語があることに気付かせるきっかけとする。

7 資料



音読カード



絵カードを活用した発音練習

8 考 察



成 果

- 継続的に「絵カード」による指導を続けてきたことが、他の教科や学校生活の中でも語彙の広がりにつながっている。
- ICTの活用による視覚的情報などの提示は、学習言語の理解を深め、日本語の語彙と児童のイメージを結びつけるために非常に有効であった。
- ◆ 中国語や英語で言い表すことを認めることで、日本語力に課題がある児童も生き生きと学習に取り組むことができた。また、その児童の自信と意欲を育てられるだけではなく、様々な言語を認めることで、多様な言語や文化、価値観を受け入れる資質育成のきっかけとなった。

課 題

- 日本語力に課題がある児童には、まだまだ理解・定着している語彙が少ない。特に、学級における学習言語の差は非常に大きいと感じている。また、中国で生活している国際結婚家庭の児童にとって、日本語の言語や文化的なイメージが乏しい。発達段階に合わせて、効果的な指導を継続していく必要があると考えられる。
- 「絵カード」の学習は、楽しく意欲的に学習に取り組めるが、定着までに時間がかかる。長期の休みなどの影響で、中国語を生活言語としている児童が学んだことをすっかり忘れてしまうケースも見られる。

まとめ

本単元における日本語支援の2つの手立ては、児童が意欲的に楽しみながら効果的に学習に取り組むことができるという点で、非常に有効である。

しかし、定着のための時間の確保することや、発達段階を把握した上で指導や支援を根気強く継続していくことなど、いくつかの課題も挙げられる。

さらに、中国語を主たる生活言語とする家庭では、中国ルーツを大切にしつつ、家庭での学習に取り組むことも必要であると感じている。児童生徒の自己肯定感を育むためにも、家庭生活ではしっかりと中国語を使うべきである。しかし、学校での日本語の学びを継続させるためにも、家庭を巻き込み、家庭でも取り組めるような日本語の効果的な学習方法を模索したい。

小学部
第2学年
国語科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

ことばでみちあんない

(たいわのれんしゅう)

授業者 ● 谷垣 諒

1 単元の目標

(1) 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。

知識・技能

(2) 相手に伝わるように、話す事柄の順序を考えることができる。— 思考・判断・表現

(3) 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞くことができる。— 思考・判断・表現

(4) 話す事柄の順序を粘り強く考え、学習課題に沿って道案内をし合おうとすることができる。— 主体的に学習に取り組む態度

2 目標項目との関連

「話す」ステージ5（教科につながる学習）

a 「学習内容について、複文を使いながら、順序だてて話す」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子6名の計12名である。中国にルーツを持つ国際結婚家庭の児童が半数以上を占め、そのうち数名の児童には日本語能力に課題が見られる。

学級全体の雰囲気として、話すことに対して意欲的な様子が見られる。教員に対しても、友人に対しても、経験した出来事やその感想など、積極的に伝えようとする姿勢が多くの子にあり、自分の話を聞いてほしい、自分の思いをわかってほしいという気持ちが強く表れている。

しかし一方で、クラス全体で発表する場面などでは、緊張して上手に話すことができない児童も多い。また、話したいことを羅列してしまうなど、出来事などを順序立てて話すことに大きな課題を感じている。

児童の伝えたい想いを大切に育みながら、伝えたいことを順序立てて話すことについて継続した指導の必要性を感じている。

4 単元について

本単元は、教材文で道案内の問題を見つけることや、実際に道案内の練習することを通して、相手の立場に立ってわかりやすく順序よく話すことや、大事なことを落とさないように聞くことをねらいとしている。

道案内という活動の中で、日常の言葉の体験をゲーム的に楽しみながら、対話の力につなげることができるスキルアップが期待できる教材である。また、本単元に取り組むにあたり、「まず」「つぎに」「そして」「さいごに」など、文をつなぐ言葉に着目させ、定着を図りたいと考えている。

本単元を通じて、順序立てて話すことができたという実感を味わわせ、日常生活や他教科の中で活かそうとする態度へとつなげたい。

5 日本語支援について

日本語能力に課題がある児童に対して、二つの手立てを用意している。

一つ目は掲示の効果的な活用である。「まず」「そして・つぎに」「さいごに」などの言葉について教室に掲示することにより、授業の中で意識づけを行い、常日頃から順序立てて話すための「文をつなぐ言葉」の定着を図る。

二つ目はワークシートの活用である。道案内の仕方を考える場面と聞き取りの場面では、二種類のワークシートを用意する。(①説明の文を全て書き入れるワークシート、②「文をつなぐ言葉」と「キーワード」だけを空欄に書き入れるワークシート) 必要な言葉を最小限に絞ることで、配慮を要する児童もポイントが分かりやすくなると考えた。

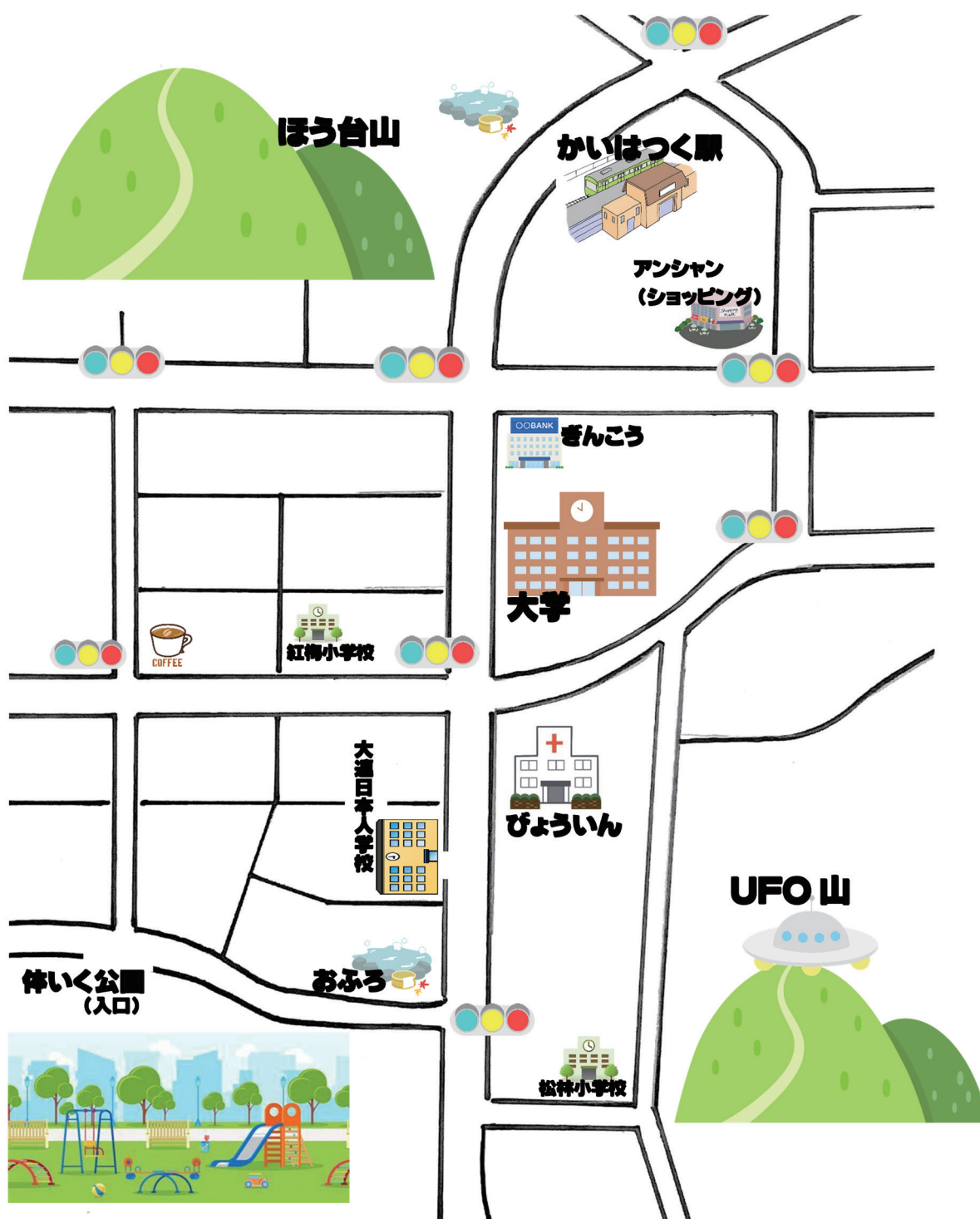
6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャラルの視点
第1時	「道あんないのし方を考えよう」 - 教科書の道案内の例を聞き、わかりやすいかどうか話し合う。 - 正しく伝えるためのポイントを整理する。	わかりやすく説明するために順序立てて話すことができるよう、文をつなぐ言葉に着目させる。 →学級掲示により定着を図る。
第2時	「わかりやすい道あんないを考えよう」 - 教科書の地図をもとに道案内（ロールプレイ）に取り組む。 - 良いところや課題について交流し、よりよい説明ができるようにする。（3人1グループ）	- 聞き手を経験させることで、相手の立場を考えて話すイメージを捉えさせる。 - ワークシートを活用し、文をつなぐ言葉に留意して話したり聞いたりさせる。
第3時 	「たからまでの道あんないをしよう」 それぞれ宝の地図を作成して、友人に宝のありかまでの道案内をし合う。（3人1グループ）	- ワークシートを活用し、文をつなぐ言葉に留意して話したり聞いたりさせる。 - 大連市内や住んでいる地域の地図を取り扱うことで、身近な地域について振り返るきっかけとする。

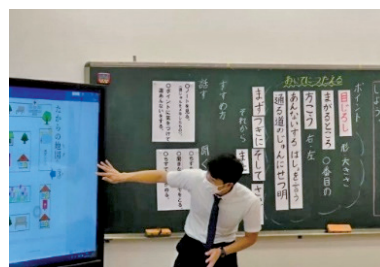
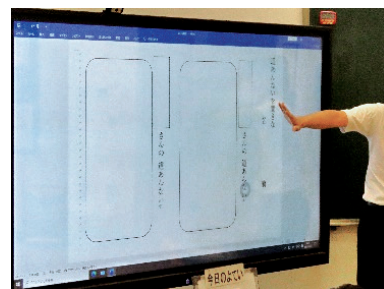
他教科、日常生活への関連

★第2学年 生活科（プログラミング学習）

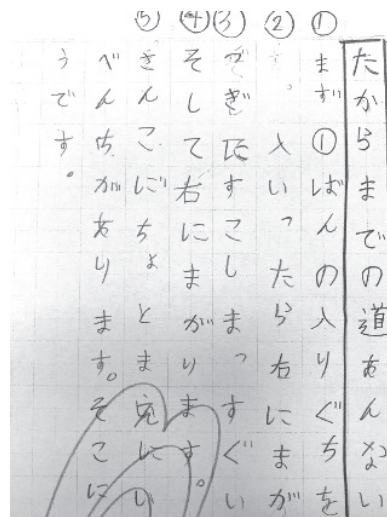
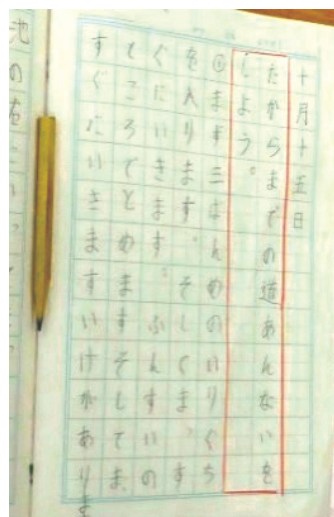
学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャラルの視点
「イモムシくんを家に案内しよう」 矢印により動きをプログラミングできるイモムシのキットを活用し、グループごとに操作を行う。	「まず」「そして・つぎに」「さいごに」などの「文をつなぐ言葉」とプログラミングを関連付け、学習の中で活用させて、定着を図る。



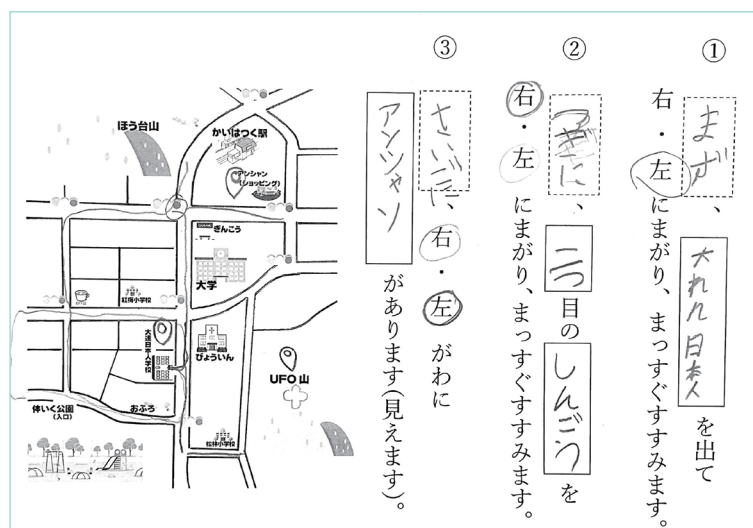
道案内地図（大連市内の地図を自作）



教室揭示



ノート 児童記入



ワークシート一例 児童記入

8 考 察



成 果

- 全員が聞き手を経験したことが、分かりやすく伝えるために必要なことを、より深く考えるきっかけとなっていた。自分が話す際には、分かりやすく話すためのポイントを意識しながら話していた。
- 道順を説明する際の手立てとして、ワークシートを用いた。全員が接続語を用いながら、順序立てて道順を説明することができた。
- ノートやワークシートに自分の考え（宝までの道順）を書き起こしたことで、子どもたちが自信をもって発表できていた。
- 「文をつなぐ言葉」として接続詞を掲示している。普段から意識するように指導しているが、この単元を通して、文中に用いながら丁寧に説明することができていた。定着してきているように思える。
- 児童の実態に合わせて、ワークシートの型にメモを書き込むように支援したことは有効であった。
- ◆ 身近な地図を使ったことで、案内する上でイメージしやすくなったように感じる。生活科で町探検をした際の学校周辺の様子を振り返りながら学習を進めることができた。地図に情報を書き込む児童や自分の家までの道順を説明する児童も見られた。

課 題

- 児童によっては、言葉の書き間違いや文法の間違えも少しあり、さらに効果的な支援や指導の継続が課題であると感じた。
- グループ時に必要な学習規律をより丁寧に指導する必要がある。
- 3人1グループでの話し合いをしたが、ペア活動（対面やフリーでペアを探していくスタイルなど）、効果的な形があったのではないかな。

まとめ

本学級の児童は、全体的に学習意欲が高い。また、積極的に人と関わろうとする姿勢が見られる。このような児童の良さを生かすため、本単元では「文をつなぐ言葉」によるモデル文の提示とワークシートという二つの手立てを用意した。これは非常に効果的であったと考えられる。

それぞれの児童が、自信をもって自分の考えを発表することができていた。一つには、上のように具体的な支援の手立てがあったからであろう。

また、大連の身近な地図を用いたことは、児童の興味関心を高めるだけではなく、特に中国ルーツ児童にとって地元に着き、生き生きと学習に取り組む原動力になっていたと考えられる。

さらに、効果的な活動形態や児童それぞれの良さを生かした実践を追究したいと考えている。

小学部
第2学年
音楽科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

いろいろながっきの音を
さがそう

授業者 ● 池須 安希

1 単元目標

- (1) 音色やリズムなどと曲想との関わりについて気づき、楽器の音色に気を付けて演奏したり、呼びかけとこたえを用いてリズムをつくったりする技能を身に付ける。

知識・技能

- (2) 楽器の音色やリズムの違いが生み出すよさや面白さを見いだして聴いたり、楽器やリズムの組み合わせ方について思いをもったりする。

思考・判断・表現

- (3) 音色とその組合せのよさや面白さを見いだして聴いたり、それらの特徴を生かして表現したりする学習を楽しみ、楽器の音色への興味・関心を広げる。

主体的に学習に取り組む態度

2 目標項目との関連

「書く」ステージ3（教科につながる初歩的な学習）

e 「観察したことを記録する簡単な文章を書く」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子6名の計12名である。中国にルーツを持つ国際結婚家庭の児童が半数以上を占め、そのうち数名の児童には日本語力に課題が見られる。ただ、どの児童も話しをすることが大好きで、積極的に人と関わろうとする姿勢が見られる。

音楽科の授業では、教材曲に興味を持ち、意欲的に授業に取り組む児童が多い。教材曲との出会いの場面や鑑賞の時間には、楽曲のもつよさや面白さなどについて、気づきや思いを積極的に発表しようとする姿勢が見られる。

しかし、児童によっては説明するための語彙の力に課題があり、周囲に上手に伝わらない場面もよく見られる。また、鑑賞活動などを通して感じ取った内容を、ワークシー

トに記入して表現することを苦手とする児童も複数名いる。音楽のイメージを言語で表すことが難しいことも、大きく影響していると考えられる。

児童が音楽を通して気づいたこと、感じたことを言語化するためには、個々の状況に応じた支援が必要であると考えている。

4 単元について

本単元では、鑑賞・音楽づくり・歌唱を通して、身近な打楽器の音色の特徴や違いをとらえ、表現の仕方を工夫する学習を進める。

本単元では「だがつきパーティー」という楽曲を中心の題材として取り扱う。この作品は様々な打楽器の音色に親しむために作曲され、子どもたちにとって身近な7種類の打楽器が用いられている。鑑賞したことをもとに交流を行い、打楽器に親しめると同時に理解を深めさせたいと考えている。

本単元を通して、「書くこと」と「話すこと」の二つの表現活動に取り組む。ワークシートに知っている楽器や楽曲に使われている楽器、それらの感想・気づきを書くことにより、学んだことを整理することができる。さらに、ワークシートをもとにして感想・気づきや自分のイメージを話すことにより、より確かな知識の定着が期待できる。

本学級では積極的に人と関わろうとする児童が多く、表現活動にも意欲的に取り組んでいる。まずは、その意欲を生かす場面設定に努めたい。そして、自分の感想や気づき、音楽のイメージを的確に言語化して伝えられる経験を、自信へとつなげたいと考えている。

5 日本語支援について

日本語力に課題がある児童に対して、二つの手立てを用意している。

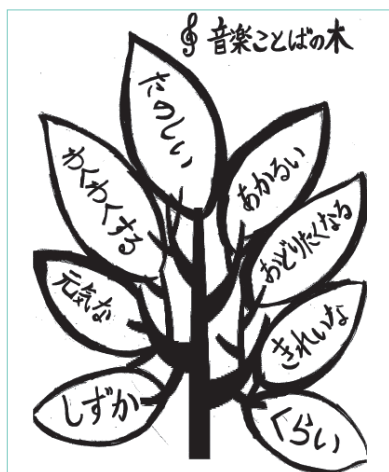
一つ目はヒントカード「音楽ことばの木」の活用である。楽曲から感じ取った感想やイメージを言語化することは難しい。そのため、自分の気づいたことや感じたことに近い言葉を選んで、書いたり話したりできるよう、イメージに関する言葉を視覚化した「音楽ことばの木」を提示し、語彙の選択に悩んでいる児童への支援の手立てとする。

二つ目はモデル文の活用である。「〇〇は、△△△△という音がする。」「〇〇は、□□□（のような）感じがする。」というモデル文を提示し、それぞれの楽器の特徴やイメージについて言語化するための支援を行う。

6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第1時 	「打楽器の音色やリズムに気を付け聴こう」 ● どのような楽器の音がするのかに気を付けて鑑賞曲「だがつきパーティー」を聴く。 ● 聴こえた楽器の名前と、その音がどのように聴こえたのかを、ワークシートに書き、発表する。 ● 教科書の挿絵を見ながらもう一度鑑賞曲を聴き、楽器の名前と音を確かめる。	○ 感想を書くときの支援として「音楽ことばの木」を提示する。 ○ モデル文「○○は、△△△△という音がする。」を活用して楽器の特徴を捉えさせる。 ◆ 身近な生活と関連させて交流させることで、学びと自身の生活を結びつけさせる。
第2時 	「曲全体を味わってきこう」 ● 楽器の音を生かした楽曲の構成や演奏方法の効果について気づかせる。 ● 気づいたことや楽器や楽曲のイメージを交流する。	○ モデル文「○○は、□□□□（のような）感じがする。」を生かして発表しやすいように支援を行う。 ○ 「音楽ことばの木」を活用し、イメージを言語化させる。

7 資料



音楽ことばの木

だがつきパーティー

♪だがつきパーティーを聞いてみよう♪
 知っているがっきの名まえをかきましょう。

きこえてきたがっきの音をかきましょう。

♪さいごまで聞いてみましょう♪
 きづいたことやかんじたことをかきましょう。

2年 ばん なまえ ()

ワークシート



「だがつきパーティー」鑑賞の様子

8 考 察



成 果

- 「音楽ことばの木」を活用することにより、日本語力に課題のある児童も自分の感想やイメージを言語化することができていた。
- モデル文を活用した発表は、非常に効果的であった。課題のある児童は言葉に詰まる場面もあったが、ワークシートとモデル文を活用して、ゆっくりとだが発表することができていた。
- ◆自分の感想やイメージを発表できたことが、それぞれの自信につながっていた。また、友人の発言に大きくうなずいて共感を示す児童も多く、学級全体としての学びを深めることにつながっていた。

課 題

- 楽器の音を表すため、子どもたちは擬音（トントン・カンカンなど）を用いていた。「音楽ことばの木」には、擬音を集めたものがあったら、さらに有効だったと考えられる。
- 本学級の国語科では「文と文をつなぐ言葉（まず、そして、最後に、など）」を活用していることを後から知った。事前に知っていれば、複文での効果的な表現につなげることができたと考えられる。
- ◆友人のイメージにどうしても共感できず、自分の意見にこだわる児童がいた。次の学年に向け、「他の価値観を受け入れる」という経験を積ませていく必要がある。

まとめ

- ヒントカード「音楽ことばの木」やモデル文という支援方法は非常に効果的であった。本学級の児童の意欲・積極性を損なうことなく、適切な支援を行い、自信をつけさせていくことにつながったと考えられる。
- 一方で、他の教科での児童の様子や指導方法などについて、教員間で情報共有や交流を行うことで、学校全体としての横断的・総合的な指導につなげていくことができるのではないかと考えた。

小学部
第3学年
道徳科

表現活動を中心にした在籍学級における日本語支援

ぼくのおべんとう

授業者 ● 菊地 博之

1 主題名・内容項目

主題名 「日本の文化」

内容項目 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

(C 主として集団や社会との関わりに関すること)

2 ねらい

我が国の伝統や文化のよさに気づき、国を愛し大切にしようとする心情を育てる。

3 目標項目との関連

「読む」ステージ4（教科につながる基礎的な学習）

c「支援を得て、物語文を読み、登場人物や場面について理解する。」

4 児童生徒の実態について

本学級は、男10名、女子7名の計17名である。中国にルーツを持つ国際結婚家庭の児童が半数以上を占める。全体的に日本語力は高いが、数名の児童には日本語能力に若干の課題が見られ、特に文章を読み取る力に差があると感じている。配慮を要する児童が、読み取ったことを生かして場面や登場人物の気持ちの変化を理解・イメージするためには、支援の手立てが必要である。

本学級の児童は、全体的に学習に対する意欲が高い。集中力に波があることが課題ではあるが、知的好奇心にあふれ、新しい学習内容に対しても意欲的に取り組む姿勢が見られる。また、多くの児童が考えや思いを積極的に伝えようとする姿勢を身につけており、学習の中では気づいたことを競うように周囲に発信する場面も見られる。

国際結婚家庭の児童の中には、日本での生活経験がほとんどない児童もいて、日本の伝統や文化への知識があまりない様子が見られる。学習活動や児童同士の交流の中で、日本の伝統や文化についての理解を深め、その良さについて考えられるような機会を設定したいと考えている。

5 教材について

アメリカの現地校に転校した「ぼく」は、昼食に「お弁当」を持っていった。ところが、それを見た友達の反応はさまざまで、からかわれて落ち込んでしまう。ある日、母が日本のことを紹介するために学校に来た折に、実際に日本の食べ物を口にした友達の「本当は食べてみたかった。」という本心を知る。日本ではあたりまえに食べている「お弁当」を通して、外国との感じ方の違いに気づいた「ぼく」が、日本のよさを分かってもらいたいと考え、行動する姿に共感できるようにしたい。

我が国には世界に誇れる伝統や文化がたくさんあるが、ふだんはそのよさに気づかないことが多い。中国・大連に住む児童たちにとっては、日本の伝統や文化に親しむ機会が少ないため、本教材を通して学習することはことさらに貴重である。

題材を通して、日本の伝統や文化に対して目を向けると同時に、外国の人々から見た日本を意識させ、中国・大連での生活経験と結びつけることで、多様な価値観を受容的に理解する資質を育成する一つのきっかけにしたいと考えている。また、その上で日本の伝統や文化が持ついろいろな良さに気づき、愛着を感じ大切にしようとする心を育てていきたい。

6 日本語支援について

本単元では、日本語力に課題のある児童に対して、以下の二つの手立てを用意した。

一つ目はロールプレイを取り入れた学習活動である。数名の児童を選出し、登場人物「ぼく」の役割演技に取り組ませる。教師と児童とで場面を実際に演じることで、児童に「日本の良さを知ってもらいたい」という「ぼく」の気持ちをイメージさせ、表情や身振り、感情を込めたセリフなどを引き出すことができるはずである。また、文章を読むだけでは状況をイメージすることが難しい児童は、ロールプレイの様子を見て、場面状況を捉えることができると考えられる。

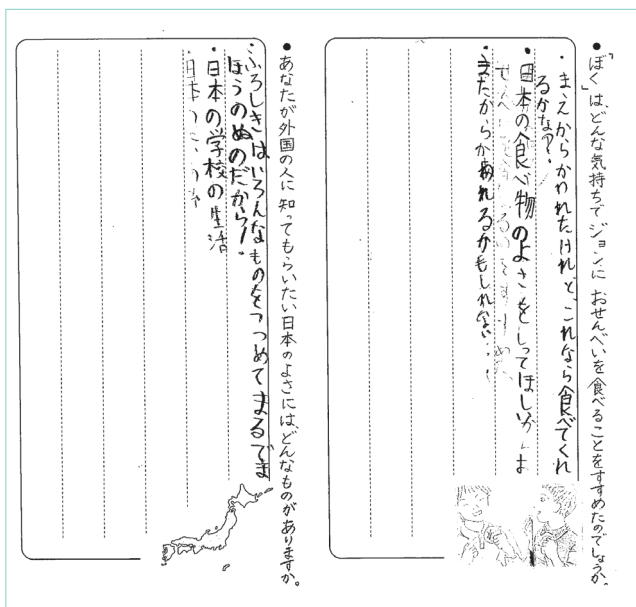
二つ目は、板書の構造化である。「嬉しい」気持ちや「悲しい」気持ちなど、登場人物の感情の起伏を場面の展開と関連付け、板書を活用して視覚化を行う。日本語力に課題がある児童は、ロールプレイで場面の状況の理解を深め、さらに板書を通して登場人物の気持ちの変化を捉えることができるのではないかと考えている。

上の二つの手立てによる支援の相乗効果により、児童が登場人物に対して共感的に理解を深めることを期待している。

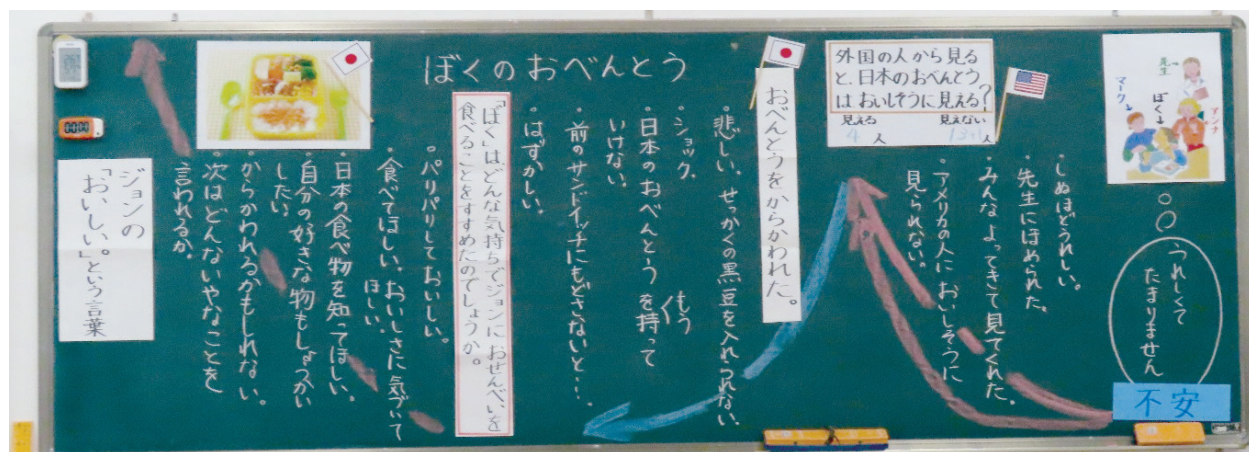
7 授業構成（総時数 1 時間）

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャルルの視点
導入	●「お弁当」について振り返り、自身の経験をもとに思ったことを話し合う。	◆ 日本と外国とでは感じ方に違いがあることに気づかせる。
展開	●「ぼくのおべんとう」を読んで話し合う。 ●「ぼく」がおせんべいジョンに勧め、「おいしい。」という言葉聞いた時の心情を考える。 ●身近な生活経験を振り返りつつ、外国（中国）の人に知ってもらいたい日本の良さについて話し合う。 ●ある児童が以前、中国と日本の「立冬」について調べたプリントを紹介し、簡単な交流を行う。	○ ロールプレイを活用し、場面の状況を再現して視覚的支援を行うと同時に、登場人物の心情について理解を深めさせる。 ○ 板書の構造化により、登場人物の気持ち（嬉しい・悲しい）を視覚化させ、児童がイメージを抱きやすいようにする。 ◆ 地域の行事や習い事など、身近なところから想起して日本のよさについて考え、話し合う。 ◆ 中国と日本の文化について紹介し、それぞれの違いについて交流する。
終末	● 今日の学習を通して日本の文化について考えたことを書く。	◆ 日本の伝統と文化について、良さに気づけるよう振り返りを行う。

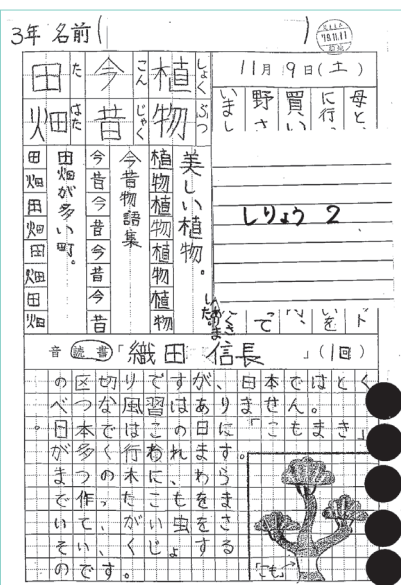
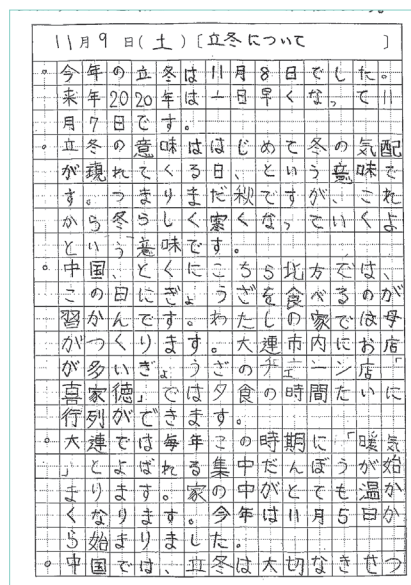
8 資料



児童のワークシート

日本の食べ物のよさを分かってもらえた時の
気持ちを考える場面（ロールプレイ）

板書の構造化

中国と日本の「立冬」について
調べたプリント

9 考 察



成 果

- 教師と選出した児童で、ポイントとなる場面のロールプレイを行った。登場人物を演じる琴を通して児童が心情の理解を深める様子、さらに適切に表現する様子が見られた。また、主人公（ぼく）の「勧めたいけど言いづらい」という心情などを児童が適切に表現することにより、読み取りに課題がある児童も場面の状況を捉えることができ、登場人物の心情をイメージすることにつながっていた。
- 板書の構造化により、場面（状況）の様子と、登場人物の心情のアップダウン（悲しい気持ちと嬉しい気持ち）を視覚化し、児童の理解を深めることができた。ロールプレイと合わせて学習を進めることで、より効果的な支援を行うことができた。
- ◆ 展開の後半部分で「外国（中国）の人に知ってもらいたい日本の良さ」について話し合う活動では、10人ほどの児童の発表をもとに、日本の伝統や文化の良さについて気づき、その具体を交流・共有することができた。また、中国での生活経験を振り返り、日中両国の違いや良さに気づくきっかけにすることができた。
- ◆ 中国と日本の「立冬」について調べたプリントを紹介する場面では、子どもたちが住んでいる中国の文化と日本の文化を比べる良い機会となった。

課 題

- 話をするにより、自身の経験を振り返って考えをまとめられる児童が数名いた。活動時間を十分に確保し、必要な児童と対話することがさらに効果的な支援につながったかもしれない。
- ロールプレイでは全員に役割を演じさせることができなかった。なるべくたくさんの児童が主体的に活動に参加できるよう、グループ活動など学習形態の工夫をすればよかった。
- ◆ 日本での生活経験があまりない児童へは、本教材だけではなく様々な機会に日本の伝統や文化にふれさせる機会が必要であると感じた。学びを継続していくこと、発達段階に合わせて学習を発展させていくことが必要であると考えている。

まとめ

ロールプレイは、児童の好奇心や学習意欲を生かせることができ、配慮の必要な児童に適切な支援を行うことができたという意味で、非常に大きな成果があったと考えられる。また、板書の視覚化との相乗効果もあって、児童は場面の状況や登場人物の心情をイメージすることができていた。

本教材自体がバイカルチュラルの資質育成が期待できるものであり、日本の伝統や文化に目を向けさせるだけではなく、中国での生活経験を生かして「外国から見た日本」をイメージさせるきっかけになったと考えている。

最後に、発達段階をふまえた上で機会を見つけ適切に学習を発展させていくこと、次の学年への継続性が今後の課題であると考えている。

小学部
第4学年
社会科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

地震からくらしを守る

授業者 ● 藤村 義之

1 単元目標

(1) 過去に発生した自然災害に対して、地域の関係機関や人々は様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対して、様々な備えをしていることを理解することができるようにする。また地図や年表などの資料をもとに、日本の災害についてまとめることができる。 **知識・技能**

(2) 過去に発生した地域の自然災害や関係機関などの協力などに着目して災害から人々を守る活動の動きを考え、考えたことや理解したことを表現できるようにする。 **思考・判断・表現**

(3) 主体的に問題解決しようとする態度や災害などの時に共助の考えを理解し地域社会の一員としての自覚を養うようにする。 **主体的に学習に取り組む態度**

2 目標項目との関連

「話す」ステージ6（教科学習）

c 「相手や場面・目的に応じて、効果的な表現方法を用いて話す」

3 児童生徒の実態について

4学年は男子3名、女子2名の計5名である。小学部の他の学年に比べて非常に少人数である。国際結婚家庭の児童が2名であり、全ての児童に日本語力に大きな課題は見られない。ただ、全体的に漢字の読み書き苦手な児童が多く、学校生活を通して語彙の知識が乏しさを感じることもある。

自分の意見をしっかり持ち、主張することを得意とする児童が多い。反面、それぞれ自身の考えに頼り過ぎる傾向があり、根拠がないため説得力に欠けるという課題が見られる。

さらに、授業の中では、普段と変わらない話し言葉で発表する児童がほとんどであり、その場に合った適切な言葉づかいを使うことも、本学級の課題である。

国際結婚家庭の児童や中国での生活が長い児童もいるが、中国・大連の状況や社会基盤を十分理解している児童は少ないと感じている。したがって、大連に住んでいることを生かし、身近な題材をできる限り活用して、中国の文化・生活などの理解を深めさせたいと考えている。

4 単元について

本単元は学習指導要領に新たに位置づけられた「自然災害」について、豊かで深い授業展開をすることができるものである。地震、津波、台風、大雨、火山災害など様々な災害が、日本ではいつどこで起こっても不思議ではない。今年の梅雨時期、8月には日本各地で大雨による被害が連日のようにニュースに上がっており、減災に向け市町村をはじめとした政府の取り組みや、「自助・共助・公助」の視点から自分や家族、地域の人々の命や生活を災害から守る取り組みについて理解させたい。そして、児童が生活する遼寧省でも大雨による浸水害や地震による被害が出る可能性が考えられ、児童にとって身近な課題を扱うことのできる単元である。

本単元の中で、学習した災害に対する知識や情報をもとに、学校で災害が起きたことを想定し、実現可能な防災への取り組みを考えさせたい。また、児童の話し合いを通して、具体策を提案させたいと考える。中国・大連の状況と災害に対する備えを自分のこととして捉える姿勢を育てたい。

最後に、「災害」という視点から日本と中国を比較することを通して、児童が身近な生活環境の違いや両国の自然環境に基づいた文化の違いに気づくきっかけにしたいと考えている。

5 日本語支援について

本学級の児童の実態をふまえ、日本語支援として以下の三つの手立てを準備した。

一つ目は、モデル文の活用である。中国と大連で起こりうる災害を調べ、「中国（大連）では〇〇の災害が起こる可能性があります。その災害によって△△のような被害を受けます。」というモデル文に沿って発表を行う。また、災害時に必要な物「災害時に必要な物は〇〇です。なぜなら□□□□だからです。」というモデル文を活用して発表を行う。モデル文を活用することにより、説明に必要な事項を捉えることに加えて、適切な言葉づかいを身につけるきっかけになると考えている。

二つ目は、動画や画像による視覚的アプローチである。調べ学習では、タブレットを活用して災害に関する動画や画像を見せる。そのことにより、災害やその被害について、児童は具体的なイメージや実感を持って語彙を理解することができると考えて

いる。

三つ目は、タブレット（ロイロノート）を活用した発表交流である。ロイロノートを活用することによって、それぞれの児童が発表時に動画や画像などの資料を容易に提示でき、発表内容をグループ内で共有しやすくすることができる。また、それぞれに対する発表への感想・意見を容易に提示・共有できるため、効果的な交流をスムーズに行うことが期待できる。

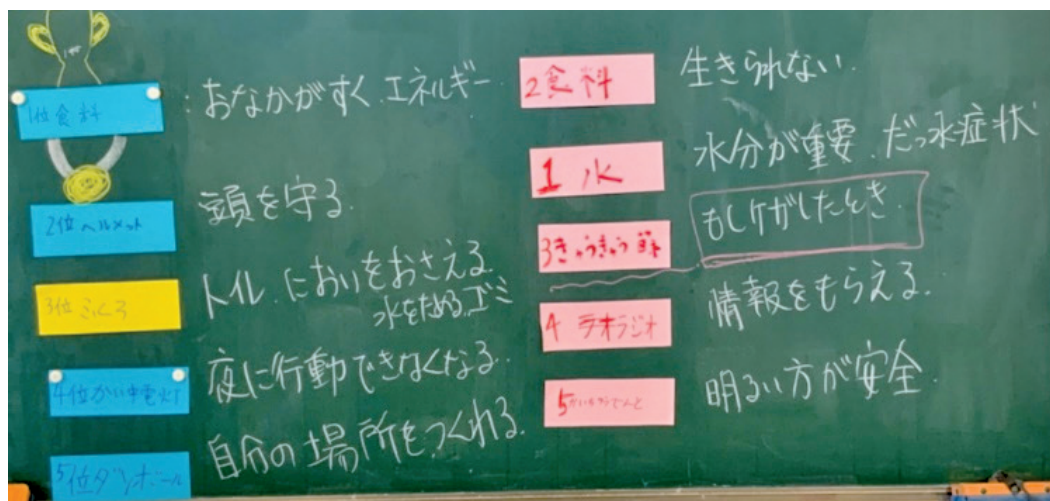
6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャルルの視点
第1時	「私たちが生活している地域の災害」 ● 中国や大連で起こる災害について、種類別に調べ学習を行い、発表する。 ● ロイロノートを使い、交流をする。 ● 日本の災害について紹介し、調べたことと比較する。	○ モデル文（「中国（大連）では○○の災害が起こる可能性があります。その災害によって△△のような被害を受けます。」）をベースに発表をさせる。 ○ 動画や画像などの視覚的情報を共有することで、災害に関する語彙について実感・具体的なイメージを持たせる。 ◆ 近年起こった日本と中国の災害について、それぞれを比較させる。
第2時	「災害から生活を守るためにそなえなければならないもの」 ● 学習内容をもとに学校にどのような用品・備蓄品があればよいか考え提案内容をまとめる。（グループ活動） ● グループごとに発表を行う。	◆ 大連での生活の経験を生かし、状況や環境を考慮して、必要な用品・備蓄品について考えさせる。 ○ モデル文「災害時に必要な物は○○です。なぜなら□□□□だからです。」を活用し、必要な備蓄品について適切に発表させる。
第3時	「地域で災害からくらしを守る取り組みをまとめる」 ● クラスで話し合ったことをもとに、クラスから学校への提案書を作る。	○ 前時で学習したモデル文をベースにして、適切な言葉づかいで提案書を書かせ、学びの定着を図る。

7 資料



ロイロノートを使った意見交換



グループ間の
情報交換

身近な災害を勉強して。
(大連日本人学校で必要と思うびちく品)

校長 先生へ
ぼくたちは、社会の勉強
で、災害のことを勉強
しました。水害のことは、
川などがあふれて、家が
とれなくなったり、家に
いられなくなったりします。土砂
災害は、建物などが壊れて、
人がけいして、死んでしま
います。その勉強した中
で、学校で災害がおこった
ときに必要と思うびちく
品について話し合いました。
まず1番必要な物は食料
です。理由は、最低3日
分の食料がないと、いけ
ない、と、学んだからで
す。あと、いっしょに帰
れるかわからないから
です。
2番目は、かい中電灯
です。理由は、土砂災害
があったら、電気が

身近な災害を勉強して。
(大連日本人学校で必要と思うびちく品)

ら、でいて、人して、ま
わりが見えなくなると、
きけい、人だからです。
3番目は、電池です。理
由は、かい中電灯やラジ
オなどが、電気がなくな
ると、使えなくなります。
もしものときに、必要
になると思うので、用
意してくれたいです。よ
ろしくお願いします。

備蓄品についての
提案書

8 考 察



成 果

- モデル文を活用することにより、説明に必要な事項と適切な言葉づかいへの理解を深め、発表に生かす様子が見られた。特に、敬語の難しさを実感しつつ、発表時に意識して使おうとする姿勢が見られた。
- 本来、発表の技能と意欲が高い集団である。根拠を明確にして発表内容をまとめることで、非常に質の高い発表活動につなげることができた。
- 動画や画像などの視覚的情報の共有を通して、災害に関する語彙について実感・具体的なイメージを伴って理解させることができ、言葉を広げる活動にすることができた。例えば、多くの児童は「地震」や「津波」を実際に見たことがなく、その恐ろしさを実感していた。また、近年大連でも多くなった「大雨」について、自身の経験と結び付けてイメージを深めていた。
- ◆ 「災害」という視点から、日本と中国の違いについて理解を深めることができた。例えば、建築物の違いについても、地震の大きさや頻度が関わっていることを知り、身近な生活と関連付けて理解を深めることができていた。
- ◆ 大連・中国の生活経験を振り返り、災害に必要な用品・備蓄品を考えることを通して、それぞれの児童が自身の身近な生活環境を客観的に見つめ直すことができた。また、避難訓練などの場面で、学んだことを自身の生活に生かそうとする姿勢が見られた。

課 題

- 災害に関わる語彙は非常に重要であるが、日常生活や他教科の中で生かせる場面は少ない。本単元での学びをきっかけにして、実感や具体的なイメージを持ちながら言葉を学ぶ姿勢を育て、さらに日常生活や他の教科に生かせる学習活動につなげていきたい。
- 本単元を通して、児童たちの適切な言葉づかいへの意識を高めることはできたが、適切な敬体の言葉づかいにはまだまだ課題がある。さらに、日常的・横断的に指導を継続し、定着をめざしていく必要がある。
- ◆ 本単元では、適切に話す力に着目して指導を行い、大きな成果があった。ただ、それぞれの考えを深める質の高い交流活動を行うためには、人の話を聞く意識や技能も重要である。今後は、発表を受容的に聞き、その上で適切な主張ができる資質の育成も必要であると感じた。

まとめ

本学級の児童たちの課題である「発表時の適切な言葉づかい」について、大きな改善がみられた。まだ、技能としては十分ではなく定着もしていないが、言葉づかいに対する意識が変容した様子と児童が本来持っている学習意欲の高

さから、今後の生活や学習の中で本単元の学びが生かされと考えられる。

また、本単元を通して、それぞれの児童が自分たちの住む大連・中国の生活を振り返り、日本との比較をして、それぞれの違いを捉えるきっかけにしていた。このことを通して、日中両国の特徴を捉え、両国それぞれの良さを比較していく学習へとつなげたい。

本単元で学んだことを通して、今後どのように日常生活や他教科への学びへとつなげていくか、横断性と継続性を模索していくことが課題であると考えている。

小学部
第4学年
道徳科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

『正直』五十円分

授業者 ● 横山 諒

1 主題名・内容項目

主題名 「正直な心で」

内容項目 正直、誠実（A 主として自分自身に関すること）

2 ねらい

自分自身を偽ることなく、明るいい心で伸び伸びと過ごそうとする心情を育てる。

3 目標項目との関連

「話す」ステージ5（教科につながる学習）

a 「学習内容について、複文を使いながら、順序立てて話す」

4 児童生徒の実態について

本学級は、男子4名、女子2名の計6名である。国際結婚家庭の児童が半数で、そのうち1名の児童には日本語能力に課題が見られる。漢字の習得率が低かったり、日本語特有の言い回しを知らなかったりする。

学級全体の雰囲気としては、明るく活発で、学習に意欲的な学級である。授業では、自分の考えを積極的に発表することができている。特に道徳の時間には、教員に対しても友達に対しても、経験した出来事やその感想などを、積極的に伝えようとする姿勢が多くの児童に見られる。

しかし一方で、話す内容をうまくまとめられなかったり、語彙が乏しく同じ言葉を何回も言ってしまうたりする児童が多い。順序立てて話すことや、感情や様子を表す語彙の少なさに大きな課題を感じている。また、主張したい気持ちが強すぎるためか、

相手の話をじっくりと聞き取ることに課題がある児童も多い。

以上のことから、児童の伝えたいという気持ちを大切にしながら、順序立てて話すことについて継続した指導をすること、様々な教科を学習する中で語彙力を高めることの必要性を感じている。また、みんなで仲間の話をしっかりと聴き、みんなで成長していく、という目標を共有し、共感的に聞く姿勢や支援的な雰囲気育てていきたいと考えている。

5 指導にあたって

『正直』五十円分は、買い物におけるお金のやり取りの中で、正直な心で人と接することで、小学生の兄弟が明るい気持ちでのびのびと生活することができた、という話である。買い物やお金のやり取りは日常でもよく行われることで、児童もイメージがしやすく、自分の考えをもちやすい。その考えを順序立てて話すことができるように指導していく。

具体的には、まず児童に「正直に行動するといいいことがあるのだろうか。」と問い、この授業で考えることを明確にする。その際に「正直」という言葉の意味を全員で確認する。

その上で問いに関係する言葉や文章を教材文から見つける活動を入れる。その時に、箇条書きやウェビングを用いて、できるだけ少ない文字数でたくさんの言葉を書き出すよう伝える。

次に全員で自分が見つけた言葉を発表し合い、問いに対する自分の意見を考える助けになるようにする。意見を考える際に、どの言葉をどの順番で話すかを考えるのが大切であることを伝え、順序立てて話ができるようにしていく。最後に自分の意見をお互いに発表し合い、「正直に行動したほうがいいのか。」という主題に迫っていききたい。

本教材を通じて、順序立てて話すことができたという実感を味わえるようにし、日常生活や他教科の中で活かそうとする態度へとつなげていきたい。また、仲間の話を全員でしっかりと聴く姿勢にこだわり、相手の考えや思いを共感的に受け止める資質を育むきっかけにしたいと考えている。

6 日本語支援について

本学級では日本語力に課題がある児童がいないため、表現力のさらなる向上を目指して三つの手立てを用意した。

一つ目は、ウェビングの日常的な活用である。道徳や国語の授業だけでなく、算数や理科の授業の中では児童が考えをまとめるときに、積極的にウェビングを活用してきている。思考を視覚化して考えをまとめると同時に、友人と思考や関連する語彙について共有させるため、思いついた単語や、教科書や資料から見つけた言葉をどんどん書くように言葉かけをしている。

二つ目は、辞書の活用である。授業の中で意味の分からない単語が出てきたときに、すぐに調べるように伝えている。調べる習慣をつけることで、日本語の知識をより増やす「言葉を広げる活動」となり、日本語力の向上につながると考える。

三つ目は、モデル文を活用した表現支援である。「私は〇〇だと思います。」「なぜなら～（根拠）」のように、モデル文をベースにして立場や考えの根拠を表現することにより、説得力のある効果的な主張ができるようになると考えている。

7 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャラルの視点
導入	「正直に行動することのよさについて考える」 ● 正直に行動できなかったことについて、児童の経験を振り返らせる。	◆ それぞれの児童に生活経験を発表させ、共感的に聴くことを意識させる。
展開	● 教材文や自分の経験から、「正直に行動することのよさ」に関係があると思う言葉を書き出す。（ウェビング） ● 書き出したり、友達と共有したりした言葉をつなげて、思考を整理する。必要に応じて辞書を活用する。 ● それぞれの考えについて、根拠を明確にし、順序立てて発表する。また、それぞれの発表について疑問などを質問し、交流を深める。	○ 活動に関連する語彙について、ウェビングに取り組む。それぞれの思考を視覚化する。 ○ ウェビングを基に交流を行い、思考や語彙の意味を交流する。必要に応じて辞書を活用し、言葉を広げる活動につなげていく。 ○ 順序立てて話すことができるよう、モデル文を活用して、根拠を述べさせる。 ◆ 友達の意見をまずは受け止め、話を最後まで聞いてから質問するように伝える。
終末	● 本時の振り返りをする。	



他教科、日常生活への関連

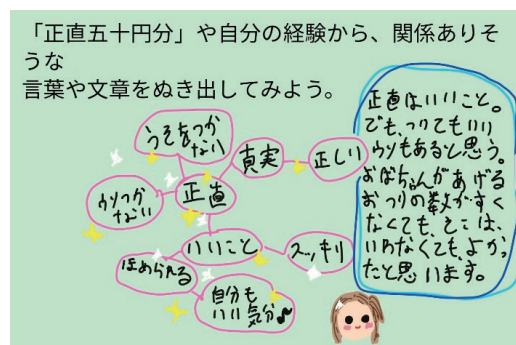
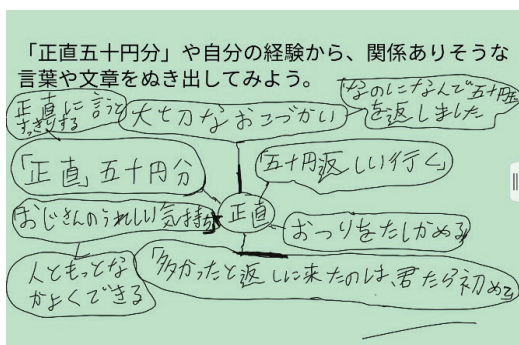
★第4学年 国語科

学習活動	ポイント
「調べて話そう、生活調査隊」 ● 資料を使って、分かったことや考えたことが伝わるように話す。	○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点 ○ 順序立てて話すことができるように、モデル文を活用して、立場と根拠を明確にして、発表原稿を考えるよう伝える。 ◆ 活動を通して、日本と中国の生活・文化の違いに気づかせる。

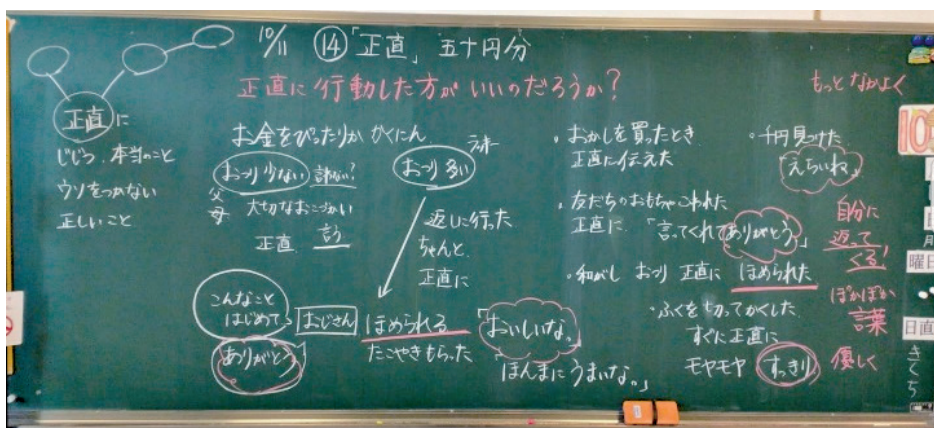
★第4学年 理科

学習活動	ポイント
「雨水のゆくえ」 ● 問題解決の見通しをもって、水の状態変化と気温や水のゆくえについて、根拠のある予想や仮説を発想し、表現する。	○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点 ○ 「まず」「そして・次に」「最後に」などの文をつなぐ言葉を用いて実験方法を説明するよう指導することで、順序立てて話す力の定着を図る。 ◆ 運動場での実験や、デジタル教科書の活用の中で、日本と中国の小学校の違いについてふれる。

8 資料



児童が記入したワークシート。ウェビングマップを使って、短い言葉で書き出している。



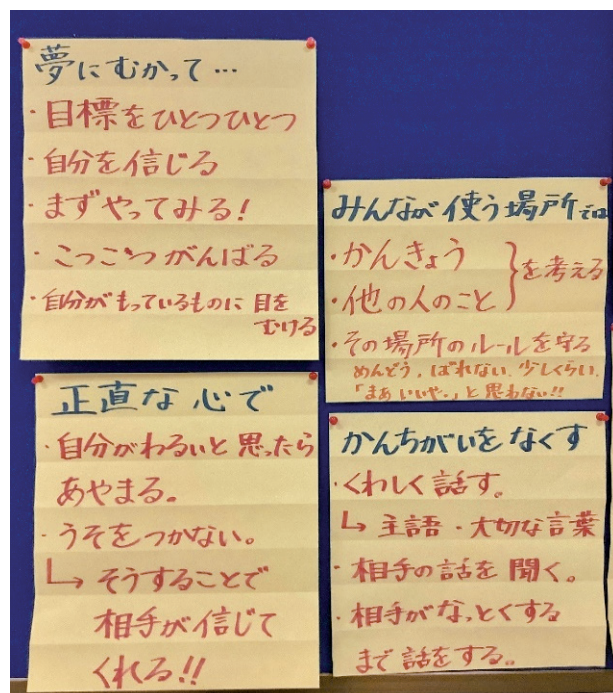
本時の板書

ぬき出したものを使って、自分の考えを文章にしよう。

正直に行動した方がいいのだろうか？

正直に行動したほうがいいと思いきや、
なぜかと言うともしかすると人にめ
いわくをかけたしまうかもしれないし
正直に言ったらその人ともとながよ
くできるかもしれないからで、
正直に言ったらしまめられたり正直の
ことを言ったら怒られるからです。

板書を見ながら自分の考えを組み立てたもの。
(児童のワークシート)



学習のまとめを掲示。

9 考 察



成 果

- 4月から各教科や道徳の時間など、様々な学習活動の中で積極的にウェビングに取り組むことを通して、児童は、関連ある語彙をつなげてスムーズに思考を整理できるようになってきた。また、ウェビングを活用して共有し、効果的な交流ができるようになってきている。さらに、それぞれの知っている語彙を共有し、それぞれが言葉を広げる様子が見られた。
- ウェビングの活用・定着により、物事を考えるときに、まず短い言葉や文をたくさん書き、それに優先順位をつけて自分の考えを組み立てるという思考の流れが身に付いてきた。また、それを色々な教科の中でも活用できるようになってきている。
- モデル文の活用により、自分の考えを発表するとき、立場や根拠（理由）などを順序立てて話すことができる児童が増えた。また、成功経験を重ねることで自信をもって自分の考えを発表する様子が見られた。
- ◆ 友人の意見を最後まで聞こうとする姿勢が育ってきている。話の内容を納得する部分にはうなずいたり賛成の意思表示をしたりと、共感的に聞く様子が見られるようになってきた。

課題

- 自分の考えを組み立てるときの優先順位のつけ方に課題がある。結論を最後にしていたり、内容がまとまっていなかったりすることがあるので、日常生活や他教科の中でできるようになってきていることの確実な定着を目指し、指導・支援に力を入れたい。
- 効果的な文章を書けるようになってきている反面、準備した原稿を読み上げるだけの発表が目立ちだしている。キーワードを中核にして、自分の言葉で話す力を身につけさせたい。
- ◆ 友達の考えを聞くことにまだまだ課題がある。結論を聞き逃していたり、自分と違う意見を受け入れられなかったりする場面が見られる。友人の意見をしっかりと聴いて受け止め、自身の考えを深めることができるよう、聴く力の育成を図る必要がある。

まとめ

本活動の中で、ウェビングやモデル文の活用をすることにより、表現力の育成を図ることができた。また、ウェビングを通して交流することで、互いに知っている語彙を共有し、言葉を広げる活動につなげることができた。何より、児童たちの積極性・学習意欲を高めながら、効果的な学習につなげることができたことが、大きな成果だと考えている。今後もあらゆる教科で「自分の考えを発表する」ことを大切に、それに取り組む時間を増やしていきたい。

またバイカルチュラルの視点からは、自分と異なる考えを受け入れるには、相手の考えをよく聞き、わからないところがあったら質問して理解することが必要だと気づくことができた。児童の話を聞く力の向上も必要なので、話を聞くときに気をつけることをこれからも児童に伝え続けていきたい。

またバイカルチュラルの視点からは、自分と異なる考えを受け入れるには、相手の考えをよく聞き、わからないところがあったら質問して理解することが必要だと気づくことができた。児童の話を聞く力の向上も必要なので、話を聞くときに気をつけることをこれからも児童に伝え続けていきたい。

【参考文献】『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』（編）齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子
くろしお出版 2015年6月1日 第1刷発行
『海外で学ぶ子供の教育』（著）佐藤郡衛・植野美穂・近田由紀子・渋谷真樹 他
明石書店 2020年8月20日 第1刷発行

小学部
第5学年
国語科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

声に出して楽しもう

古典の世界（二）

授業者 ● 安藤 久美子

1 単元目標

(1) 親しみやすい漢文を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しんでいる。

知識・技能

(2) 古人の考え方や物の見方にふれ、自分の考えと比べて考えを深めることができる。

思考・判断・表現

2 目標項目との関連

「書く」ステージ5

b「内容に見合った語彙や表現や文体を使って作文を書く。」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子7名の合計13名である。国際結婚家庭が約6割と、中国にルーツを持つ多数の児童が在籍している。家庭では主に中国語を使用している児童が多いため、文法や語彙力など日本語の力において個人差が見られる。たとえば、「風が強い」ことを「風が大きい」、「電気をつける」ことを「電気を開ける」など、中国語に由来する誤った言葉づかいをする場面もよく見られる。

学級は全体的に学習に対して意欲的に取り組む児童が多い。特に、国語科の学習に積極的に取り組む姿勢が見られる。また、何事に対しても前向きに捉えて挑戦する雰囲気、友人の良さを認めて支え合う明るい雰囲気があふれている。

4 単元について

本単元では、親しみやすい漢文を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむことをねらいとしている。「声に出して楽しもう」の学習は「我が国の言語文化に関する事項」の系列に対応している。第1・2学年には多くの昔話や神話・伝承に触れている。第3・4学年では短歌や俳句に触れており、第5学年では1学期に古文を学習している。様々な古典や文語文と出会い、それらを音読したり暗唱したりすることを通して、日本の伝統文化にさらに親しみ、知識と愛着を深めていくことができる。

本単元では、漢文を扱い、音読を通して響きや調子を味わうとともに、中国の古典を読む意義を感じさせる。これまで、俳句、短歌、古文の学習をしてきた。本単元では、日本の文化に大きな影響を与えた中国の古典の文章である漢文を取り上げる。本教材では日本人の生き方に大きな影響を与えている「論語」と日本人にもよく親しまれている漢詩の「春暁」を読む。書き下し文は、文語文と同じように読めるが、文語文より端的に、歯切れ良く感じられる。これが漢文特有の表現に結び付くこと、日本の古文との違いに着目させて、音読や暗唱をさせていく。

5 日本語支援について

本単元では、親しみやすい漢文を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむことをねらいとしている。「声に出して楽しもう」の学習は「我が国の言語文化に関する事項」の系列に対応している。第1・2学年には多くの昔話や神話・伝承に触れている。第3・4学年では短歌や俳句に触れており、第5学年では1学期に古文を学習している。様々な古典や文語文と出会い、それらを音読したり暗唱したりすることを通して、日本の伝統文化にさらに親しみ、知識と愛着を深めていくことができる。

本単元では、漢文を扱い、音読を通して響きや調子を味わうとともに、中国の古典を読む意義を感じさせる。これまで、俳句、短歌、古文の学習をしてきた。本単元では、日本の文化に大きな影響を与えた中国の古典の文章である漢文を取り上げる。本教材では日本人の生き方に大きな影響を与えている「論語」と日本人にもよく親しまれている漢詩の「春暁」を読む。書き下し文は、文語文と同じように読めるが、文語文より端的に、歯切れ良く感じられる。これが漢文特有の表現に結び付くこと、日本の古文との違いに着目させて、音読や暗唱をさせていく。

6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャラルの視点
第1時	「論語と春暁を音読して、中国の古典にふれよう」 ●「論語」を音読して言い回しやリズムに親しむ。 ●現代語訳を読み、日本語と中国語の共通点・相違点（語順や言葉遣いなど）について考える。 ●論語の中で述べられている考え方について地理解を深め、自分の考えを交流する。	○ 電子黒板を用いた掲示により、原文と書き下し文の違いを捉える。 ◆ 語順や言葉遣いなど、日本語と中国語の共通点・相違点を身近な経験と関連付けて交流する。 ○ 交流を通し、配慮を要する児童が表現につながるキーワードを捉えられるように支援を行う。
第2時	●「春暁」を音読し、漢詩の言い回しとリズムを味わう。 ●現代語訳を読み、日本語との共通点・相違点（語順や言葉遣いなど）について考える。 ●漢詩の情景を思い浮かべ、イメージを伝え合い、共有する。	○ 電子黒板を用いた掲示により、漢詩の原文を提示して児童の興味関心を高める。 ◆ 中国語の得意な児童には中国語で提示した漢詩を音読させる。

7 資料

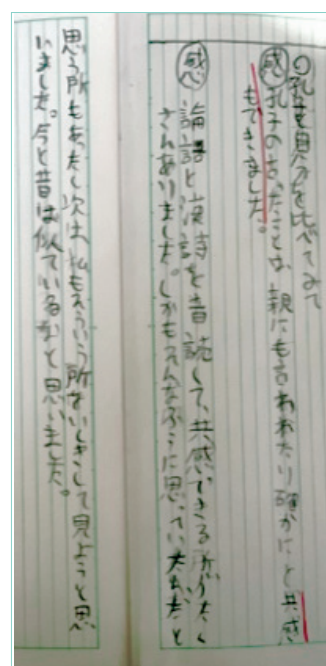
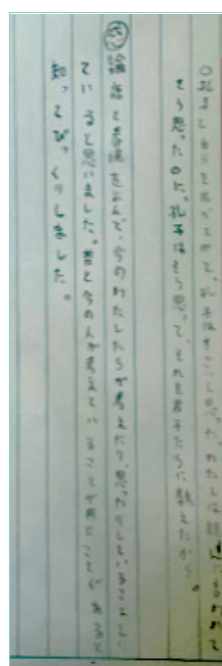
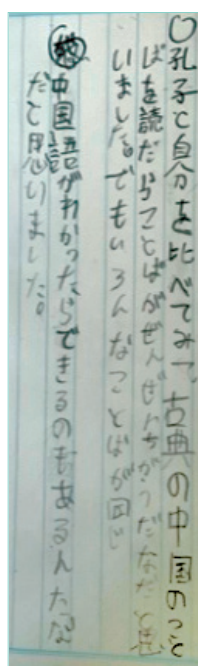
子曰：己所不欲，勿施于人。

子曰：“过而不改，是谓过矣。”



春暁 孟浩然

春眠不觉晓，处处闻啼鸟。
夜来风雨声，花落知多少。



児童のノート

8 考 察



成 果

- 国際結婚家庭の児童にとって、日本語に対して苦手意識を持っている児童も多い。今回の学習は漢詩の学習だったため、導入の段階で書き下し文ではなく、原文を示したことで児童が興味関心を持つことができていた。国語が苦手でも中国語を話したり読んだりすることのできる児童が漢詩を意欲的に音読する姿はとても印象的だった。
- また、自分の考えを表現する場面では、友達の考えを取り入れたり、授業内で示した作者や情景をイメージできるような写真を示したりしたことで、児童それぞれが自分なりに考えたことを言葉で表現することができていた。
- ◆ 現地での幼稚園・小学校の経験がある児童など、中国ルーツの児童は取り上げた漢詩になじみが深く、初めてふれる児童へ知識を伝えるなど、活躍する様子が見られた。

課 題

- 児童の興味関心を高めた導入をすることはできたが、考えを表現する場面で日本語が苦手な児童だけでなく、すべての児童が自分の考えを豊かに表現できるような手立てを準備することができていなかった。

本単元の学習活動は、学級の支援的風土が非常に効果的に活用できる実践となった。日本語での表現が難しい児童にとっては、児童同士の支援によって適切なキーワードを見つけ出し、表現活動の中で日本語の力を高めることができた。同時に、中国ルーツの児童がそれぞれの知識や経験を生かして活躍することにより、学級全体が理解を深めることができた。

支援的な風土を教育実践の中で生かすことにより、日本語の力を高めることだけでなく、自己肯定感を高めることや違いを受け入れて理解を深めることなど、バイカルチュラルの資質育成につなげていくことができると考えられる。

小学部
第5学年
図画工作科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

カードを使って

(鑑賞)

授業者 ● 浅野 万里菜

1 単元目標

(1) アートカードでゲームをしているときの感覚や行為を通して、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさを理解する。—— **知識・技能**

(2) 我が国や諸外国の親しみのある美術作品の造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。——

思考・判断・表現

(3) 主体的にアートカードに描かれた形や色を見て、感じたことや思ったことを伝え合い、見方や感じ方を深める学習活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。——

主体的に学習に取り組む態度

2 目標項目との関連

「話す」ステージ5

a 「さまざまなトピックの会話に積極的に参加する」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子7名の計13名である。そのうち、約7割の児童が国際結婚家庭である。全体的に日本語能力は高いものの、一部の児童に課題がみられる。版画を摺るの「する」の意味が分からなかったり、まんべんなく塗るの「まんべんなく」という言葉が伝わらなかったりなど、教師が発する言葉の意味が伝わらず、言い直すということがあった。絵を描いたり立体作品を作ったりすることがすきで、授業の合間には、友だちの作品を見て、素敵だと思うところを相手に伝えたり、アドバイスをしたり、互いに関わり合いながら作品制作に取り組んでいる。

一学期には、有名な作者の芸術作品の鑑賞として、アートカードを使ってアートカルタをした。40枚のアートカードの中から一枚カードを選び、そのカードの読み札として、「気持ち」「動き」「色」「様子」「形」「その他」のカテゴリの中から3つについて書いた。その読み札を教師が読み、学級全体でカルタのように取りあうという活動である。自分の知っている言葉を並べて試行錯誤しながら読み札を作っていたが、カルタなのでできるだけ絵札をとられないために、簡素な語彙やわかりづらい言葉で表現する児童がいた。

ゲームに対して意欲的に取り組むことは非常によいことであるが、目的やルールをしっかりと共有し、活動を通して相手に共感してもらう楽しさや喜びを味わうことができるように配慮していきたい。

4 単元について

本単元は、マッチングゲームを通して、友人と自分の見方を交流することで、形や色、材質へのイメージを広げることができると考えた。ここでは、児童自身が試行錯誤する中で見方を身につけられるように配慮する。この活動を通して、①主題（人物や風景など）、②技法（版画や焼き物など）、③造形要素（形や色、構図など）、④材料（土、ブロンズ、木など）など多面的な見方で作品に親しむきっかけとなるだろうと考えた。

また、アートカードを使っただけの活動には、正解がない。したがって、児童それぞれが自由にのびのびと自分の考えを表現することが期待できる。ゲームを通して友だちと交流する中で、普段は気づかない自他の異なる見方や感じ方が意識化されるようになる。このような、異質な考え方や感じ方を肯定的に受けとめ、他者の気持ちを思いやることによって「共生感覚」や「コミュニケーション能力」などが構築されるだろう。めくったカードの特徴を一瞬で感じ取り、言語化することにより、友だちと自分の考えの共通点や相違点を知ることや、その上で自分の考えを深めることがバイカルチュラルの資質育成につながると考えた。

主体的に活動する一つの手段として、鑑賞をゲーム化することで児童のやる気を喚起させることができる。児童たちの意欲を大事にし、ルールをしっかりと理解した上で、自信を持って自分の思いを伝えることができ、鑑賞することの楽しさを十分に味わわせたいと考える。お互いの考えを素直に受け入れられるような温かい雰囲気での授業にしていきたい。

5 日本語支援について

日本語力に課題のある児童に対して、次のような手立てを行う。

一つ目は、視覚的支援である。まずは、ルールを把握しやすいように、ゲームの流れとルールをチャートで掲示し、いつでも見返すことができるよう配慮する。チャートを活用してルール確認をすることで、配慮が必要な児童も自信を持ってのびのびと活動できると考える。

また、実物投影機で作品カードを映し出し、共通点として挙げられたポイントを学級全体で確認しながら共通理解がはかれるよう配慮する。

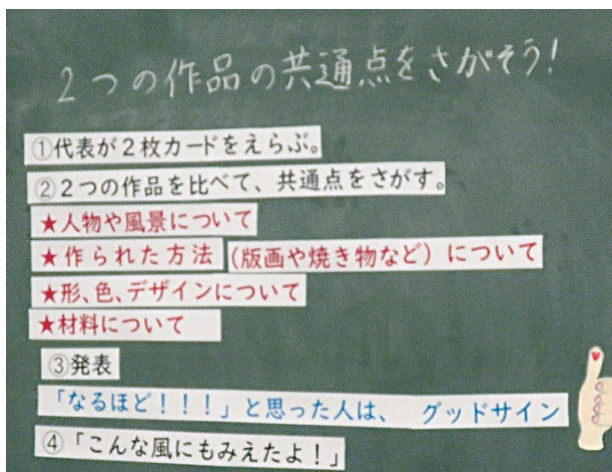
さらに、ジェスチャーによるグッドサイン（親指を立てて上を向ける）を活用することにより、意思表示を明確にしやすいように配慮する。

二つ目は、グループ形態など学習環境の工夫である。3人一組で机を囲むように座り、各グループにアートカードを1セット置くことで、自然とグループ全員で絵を見るようになる。日本語に課題のある児童も友人の発言から日本語で伝えるためのヒントを得て、全体発表の場で活躍できるだろうと考えた。

6 単元構成（総時数1時間）

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチャルルの視点
導入 	● アートカードの紹介と、マッチングゲームのルール説明	○ ゲームの流れとルールのチャートを黒板に掲示する。
展開	● アートカードでマッチングゲームをする。（2枚のアートカードを無作為に引き、共通点を探して説明する） ● 交流・発表 できるだけ多くの共通点を発表させる。自分とは異なる意見も認め合う。	○ 3人一組でのグループ構成 児童同士の相談や話し合いから日本語で表現するためのヒントを得ることができるようにグルーピングする。 ○ 実物投影機を活用し、視覚的情報を共有する。 ◆ 自分とは異なる意見も受け入れるというルールを徹底させる。 ○ グッドサインによる他者を認める意思表示をさせる。
終末	● 学びのふりかえりをする。（ワークシート）	

7 資料



ゲームのルールを視覚化



友だちとカードを見ている様子



実物投影機で共通理解

アートカードゲームをしよう! 5年 名前 ()

◎2つの作品の共通点をさがそう!

悩んだときはこんなところを見てみて!

①人物や風景について ②作られた方法 (版画や焼き物など) について
③形や色について ④材料について

カード番号	共通点	友だちの考えを聞いて
① 19 21	同じ色がある。	なるほど。 おもしろい。
② 18 37	人がいる。糸。不思議。植物がある。	なるほど。 くどいのかたがた げだと思ってる。
③ 8 32	動物がある。くさい。動物がある。	なるほど。 昔はいいのは同じ。
④ 9 33	同じ色がある。直糸がある。	なるほど。 はしかて。
⑤ 15 27	家がある。人がいる。字がある。植物がある。同じ色がある。	和風はのほろかる作 じんのふくは和風では ない。なるほど。

◎今日の学習をふり返って

2つの糸の共通点を見つけたのか。早くね、た。

◎自己評価

よくできた...◎ できた...○ あまりできなかった...△

楽しく学習できましたか。

二つの作品の共通点を見つけることができましたか。

友だちの感じ方と自分の感じ方のちがいに気づき、作品のよさや美しさをかんじることができましたか。

子どものワークシート

アートカードゲームをしよう! 5年 名前 ()

◎2つの作品の共通点をさがそう!

悩んだときはこんなところを見てみて!

①人物や風景について ②作られた方法 (版画や焼き物など) について
③形や色について ④材料について

カード番号	共通点	友だちの考えを聞いて
① 19 21	どうせ青とみどりを使っている。糸もくねくね。	なるほど。
② 18 37	人かいる。くさい色が使われている。	なるほど。そんなに考えたのかな。
③ 32 8	道に歩いている。動物。くさい感じがする。	動物物いなくないかと思った。
④ 33 9	丸っぽい。明るく楽しい。緑がある。	なるほど。
⑤ 15 27	青にみえる。ざわわっている。和風。	なるほど。

◎今日の学習をふり返って

絵についていろいろ考える力かおに付いた。友達の考えについて考えられた。

◎自己評価

よくできた...◎ できた...○ あまりできなかった...△

楽しく学習できましたか。

二つの作品の共通点を見つけることができましたか。

友だちの感じ方と自分の感じ方のちがいに気づき、作品のよさや美しさをかんじることができましたか。

8 考 察



成 果

- 児童が発表しやすい環境を作ること、気楽に発表することができているようであった。また、色や形に関しての共通点は、簡単な単語で発表することができるので、日本語力に課題のある児童も積極的に発言する姿がみられた。自分の考えとは異なる他者の意見も認め合うというルール設定のため、児童たちは自信を持って考えを述べることができていた。また、交流の中で互いの見方を知り、認め合える場面が見られた。
- ◆ グループの交流の中で、共通点や相違点に気づく児童がいた。友人の意見やつぶやきに助けられるなど、グルーピングの効果が表れていた。
- ◆ 南薫造の《曝書》という作品をみて、その描写を「日本っぽい」と表現した児童以外に「中華っぽい（中国っぽい）」といった児童や「ベトナムっぽい」といった児童がいた。それぞれが、育った環境・経験によって絵のイメージが異なることを共通理解できた。

課 題

- 活動中である2つのカードを見て「どちらもこの世にはないもの」という共通点をあげた児童がいた。日本語支援が必要な児童には“この世にないもの”という言葉を理解することが難しいようであった。そのため、実物投影機などの視覚的支援とより具体的な説明があれば、理解を深めることができたと考えられる。
- 活動と交流に時間を割き、振り返りに十分な時間を確保できなかった。支援に必要な時間を考慮し、ゆとりのある展開の工夫などが必要であった。

絵画鑑賞とそれぞれの児童が捉えるイメージは、正解がなくそれぞれの主観に委ねられている。本単元の実践を通して、それぞれの児童が自分のイメージをのびのびと表現することを重要視していた。児童同士が交流しながら、より適切な表現・言葉で伝えようとし、各自のイメージを共有していく楽しさを実感できたと考える。

【参考文献】 日本文教出版 図画工作教師用指導書、アートカード解説 5・6上/5・6下『クラスメートは外国人（課題編）』 編：「外国につながる子供たちの物語」編集委員会



小学部
第6学年
算数科

表現活動を中心にした在籍学級における日本語支援

考える力をのばそう
～関係に着目して～

授業者 ● 佐藤 和彦

1 単元目標

(1) 変化する2つの数量を表に表すことを通して、数量関係や規則性を見つける能力を伸ばす。

思考・判断・表現

(2) 変化する2つの数量を表に表すことを通して、数量関係や規則性を見つける能力を伸ばす。

主体的に学習に取り組む態度

2 目標項目との関連

「読む」ステージ6（教科学習）

d「文章全体の大意を把握し、自分なりの意見や感想を持つ」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子4名、女子3名の合計7名である。国際結婚家庭の児童がほとんどであり、中国にルーツを持つ児童が多数を占めている。家庭では、中国語を主要言語で話し、日本語は学校でのみ話している児童もいる。日本語を話す力、書く力、聞く力ともに十分な力を備えており、学習言語の習得も容易にできる。クラス全体として、友だちの考えを受け入れて自分の考えと比べてみたり、自分の考えを話したことに対して意見をもらったりすることができる。

算数の学習では、比例・反比例の学習を通して2量の変化のきまりについて学習している。比例の性質、反比例の性質はよく理解しているが、その性質に当てはまらない2量の変化のきまりを見つける学習は比例反比例を学習後初めてとなる。変化の規則は比例・反比例だけではないことを実際に自分で調べる中で経験し、実感してほしい。自分の考えをノートに書く際は、間違っているとしても何かを書くことが大事であることを4月から伝えてきているので、その後の共有の時間で、どこまで自分の考えがあって

いて、どこで間違っていたのかを明らかにすることで、次の学びにつながるので、その時間を十分に確保したい。また、共有する際は、自分の考えに自信がない児童も出てくると予想されるので、ロイロノートを使用してノートに書いた自分の考えを共有し、友だちの発表を聞く中で正しい答えを導き出せるようにする。

4 指導にあたって

2量の変化のきまりや対応に着目し、図や式などを用いて問題解決に取り組む。解決に取りかかる際は、「きまりを見つければ段の数が多いときでも解決できそうだ」という解決意識、見通しをしっかりともたせるようにしたい。また、式の読み取り、一般化、活用は、図や言葉と式を関連付けしながらていねいに扱いたい。

変化のきまりを見つけたら、式などで端的に表現する。このことにより、問題の解決が容易にできるようになる。きまりを見つけてそれを端的に表現するよさを感じることで、以後の問題解決で意欲的に活用しようとする態度が育成される。本時展開では、きまりを式に表し、その式を使って様々な段の数のときの板の数を求めることまで扱う。その式の中では、具体的な場面を表現した式にある数から、一般性を読み取って一般化した式づくり、その式を活用するという過程を大切にするようにしたい。

今回の授業はオンラインで行うため、対面での授業ができない。そのため、分からないことや質問に関しては Dingtalk を使いながらいつでも指導者へチャットを介して連絡が取れる状態を作っていく。また、友だちの考えを共有する際はロイロノートを活用し、画面の目の前で友だちのノートが見られるようにする。その際、写真の撮り方によっては見えにくい事象が発生するので、明るさ、角度を調整し、全体が入るようにすることを伝えていく。

5 日本語支援について

日本語支援が特に必要な児童はいないが、本授業において、規則性を見つけて式をたてることを難しいと感じる児童が出てくる可能性が考えられる。また、式を日本語で説明することが難しいと感じる児童がいると考えられる。その場合において、質問できる環境を整えるため、Dingtalk でのチャットをいつでも使用できる状態にする。児童自身の言葉で表せないような質問は写真を送ることによって解決できる糸口を作れるようにする。解決する際は、はじめはチャットを通して言葉でやりとりするが、難しそうな場合は個別でオンラインにつなぎ、じっくり話を聞き、問題に取り組めるようにする。

6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第5時 オンライン	1 問題を読み題意をとらえる。 図のように正三角形の板を並べていきます。21番目には、板が何枚並びますか。 めあて きまりを見つけて式に表そう 2 自分の考えをノートに書く。 6段目を数えてみよう。 21段目まで数えるのは大変だ。 - 規則性がありそうだ。 3 考えをロイロノートで共有する。 - きまりが見つかったよ。 - 式に表すことができたよ。 - 式の意味が分からないな。 4 きまりを式に表すと数が大きくなっても答えを求めることができる。 - きまりを式に表して説明できるようになったよ。 5 まとめをする。	○ 電子黒板に課題を提示し、本時で扱う問題場面を正確に把握させる。 ○ ノートに書いている時間は通信を切り、Dingtalk を使用して個別に質問に答えられるようにする。 ○ ロイロノートを共有し、考えを比較し、同じところ・違うところを考える。 ◆ いろいろな考えを見て考えることにより他者の考えをもとに自分の考えを深める。



他教科、日常生活への関連

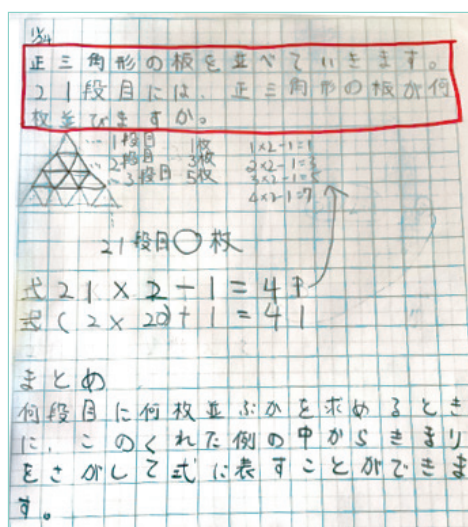
★第6学年 国語

学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
「大切にしたい言葉」 ○ 自分の大切にしている座右銘を友だちに紹介する。	○ 質問があるときや分からないときは Dingtalk ですぐに答えることができる。

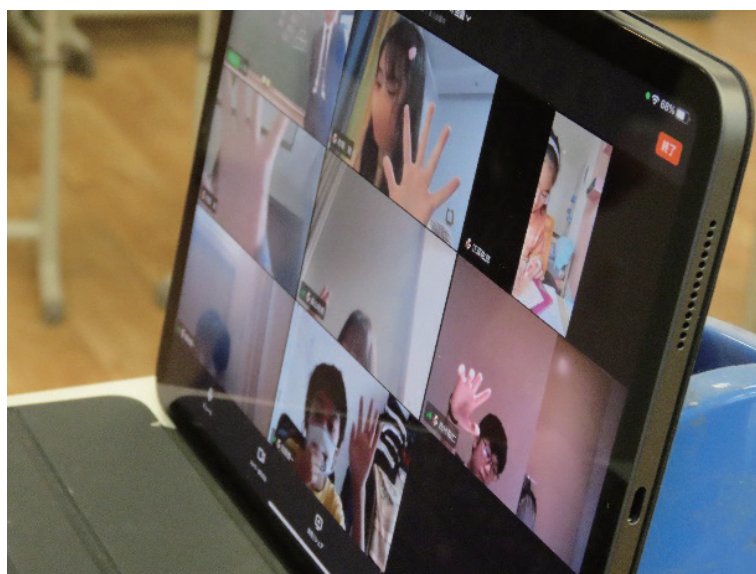
7 資料



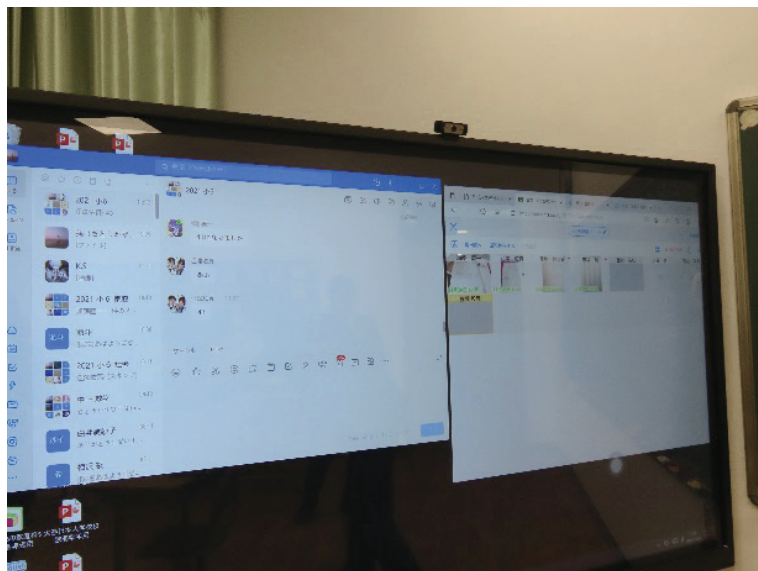
ICT 機器を活用し視覚的支援を促す。



児童の学習の記録。終末において自分の言葉でまとめることができた。



オンラインであっても考えを発表し、それを認め合うことで活発な意見交換ができた。



教師用モニターには質問用チャットとロイロノートを同時に開き、児童の様子を随時確認しながら授業を進められるようにしている。

8 考 察



成 果

- オンライン授業の中で、自分の考えをノートに書いてタブレット（ロイロノート）を活用して提出させた。ノートの書き方を共有すると自分の間違いに気づき訂正をする児童もいた。自分の考えをなかなか書けなかった児童も友だちの考えを見ることにより、説明の書き方が分かり自力でノートに考えを書くことができた。自分の考えを発信できることにつながり、他者の考えと比べることで深い学びにつながった。
- 発表する際、それぞれの児童が自分の間違いの原因について、自分の言葉で正しく説明することができていた。自分自身を客観的に見るができるようになることで、自己受容、他者理解が深まった。
- ◆ 間違いについても教員側はできるだけ肯定的な言葉がけをし、つまずきのポイントを説明したことで、児童は間違いを恐れることなく、それぞれの意見を積極的に交流することができていた。

課 題

- 算数の規則性を見つけて式をたてることを難しいと感じる児童に対して、個別に指導していく必要があった。

まとめ

「規則性を見つける」というゴールに向けて、自分の考えをノートに書き、書いたものを交流する中で、よりよい考え方がないか子どもたちで考え、発表時間を設定した。支援的風土が根付いている本学級において、互いのノートを確認したり、相手の考えの良さを認めたりすることは自然と行うことができおり、相手に認められることが自信となり、自己肯定感をはぐくむ大きな一因となっていた。

これらのことから、日頃から相手の違いを受け入れることや認めることを意識した学校生活を過ごすことが、学習面においても大きな効果をもたらしていると考えられる。

一方で、考えたことが画一的になってしまった部分も多かった。今後は方略的能力を身にさせ、課題を多面的に捉えられるようにすることが、生徒一人一人の考えの幅をより広くすることにつながると考え、実践していきたい。

【参考文献】 言語学習とは何か 教科学習に必要な言語学習 バトラー後藤裕子著
(算数における抽象的な専門語の指導や数学思考過程の言語化にける用語の厳密な使い方において参考とした)



小学部
第6学年
家庭科

表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

こんだてを工夫して

授業者 ● 石倉 右理

1 単元目標

- (1) 献立を構成する際の留意点が分かり、栄養を考えた1食分の献立作成の方法や調理の基礎について理解する。 **知識・技能**
- (2) 栄養バランスを考えることや、おいしく楽しく食べるための工夫について考え、考えたことを表現する。 **思考・判断・表現**
- (3) 自分が実践することを意識しながら、食事を作るための課題の解決に向けて取り組んだり、振り返ったりして、改善しようとする。 **主体的に学習に取り組む態度**

2 目標項目との関連

「話す」ステージ6（教科学習）

- d「クラス全員に対して、学習内容について、教科用語を使い道筋を立てて詳しく説明したり、発表したりする。」

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子4名、女子3名の合計7名である。国際結婚家庭の児童が半数以上だが、読み書きをはじめ日本語力に課題が見られる児童はいない。また、学級には支援的風土が根づいており、友人の発表を受容的な態度で聞くことができる。

話すことに関しても、しっかりと筋道を立てて話すことができるなど、日本語力の高さが見られる。より質の高い発表をめざして取り組み、それぞれの児童が考えをより深められるような交流が行えるようにしたいと考えている。

本学級の国際結婚家庭の児童は、日本で生活した経験がほとんどない場合が多く、日本では一般的とされていることでも、全く知らないことがよくある。日本の文化や社会について具体的なイメージをもてるように、視覚的な情報による支援を行ったり、

日本での生活が長い児童から知識を得られるような機会設定したりと、様々な支援を重ねながら伝えていく必要があると感じている。さらに、日中両国の文化や生活について、肯定的に考えられるように指導をしていくことも重要である。

4 単元について

本単元は、献立を立てる際に気をつけるポイントを知り、そのポイントを意識しながら献立を工夫して考えることをめあてとしている。

5年生で5大栄養素のはたらきについては学習しているので、バランスについても意識させながら献立を考えることで、学習した内容を深めさせる。

身近な食品で作れるもの、自分達でも作れそうなもの、という条件をつけた上で献立を考えることで、実際に作る時の行程も意識させたいと考える。クラス内で発表しあい、決めたものを調理実習で取り扱うことで、達成感を感じさせたい。教科書やワークに載っている献立例を挙げることで、家庭での実践を増やせるように取り組む。

また、本単元の中で、「食」という視点からそれぞれの児童の生活経験を交流させる機会としたい。日本と中国、両国の食文化の共通点・相違点の理解を深めることにより、両国の生活や文化を肯定的に捉える一つのきっかけなると考えている。

5 日本語支援について

それぞれの児童が日本語力を高めることをめざし、日本語支援として二つの手立てを考えた。

一つ目は、ICTの活用である。タブレット（ロイロノート）を活用することにより、視覚的情報の提示・共有と、それぞれの児童の考えの共有・交流を容易に行うことができる。本単元では、途中から新型コロナウイルスの影響によりオンライン授業となったが、通話アプリとロイロノートを併用することにより、効果的な日本語支援を行うことができた。

二つ目はワークシートの活用である。ワークシートを活用することにより、見出し（ラベリング）や構成、視覚的情報の提示の仕方、発表のためのモデル文など、効果的な発表をするために児童が必要とする事項を共有することができる。また、ワークシートを活用することで、児童の見取りを丁寧に行い、文章を簡潔に要約することなど、それぞれの児童に合った指導を充実させたいと考えた。

6 単元構成

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第1時	「食べ物の栄養素とその働き」 ● 5学年時の復習として、食品を働きや、栄養素ごとに分類する。 ● メニュー例から一つを選び、栄養バランスをチェックする。(アプリを使用する)	○ タブレット(ロイロノート)を活用して、情報の提示・共有を図る。 ○ 意見を出し合いながら、話し合いをさせる。
第2時・3時・4時 オンライン	「1食分のこんだて作成」 ● 主食・主菜・副菜を意識しながら献立を考える。 ● 材料や作り方を調べ、まとめる。 ● 5大栄養素ごとに材料を分け、材料やレシピをみなおす。	○ ワークシートを使い、効果的に伝えるため必要な事項を意識させながら、まとめに取り組ませる。 ◆ 料理や食材については身近なものとする。(和食・中国料理など、児童にとって身近なもの)
第5時 オンライン	「こんだてをプレゼン」 ● こんだてのおすすめポイントを記入 ● 1人ずつ発表 ● 調理実習で作りたいものを投票	○ 発表する内容を提示する。 ◆ 友人の発表を肯定的に受け止め、評価を行う。

7 資料

めあて：6年生のみんなのために、1食分の献立を考えよう



料理名：青椒肉糸

材料：牛肉か豚肉200g～300g ビーマン2つ たけのこ1パック(水煮) 醤油、片栗粉各小さじ1 オイスターソース、みりん各大さじ1 砂糖小さじ1 ごま油、塩コショウ適度

作り方：1.肉を細切りやこま切れに切りボールに入れ、醤油、片栗粉で下味をつける。片栗粉は最後に入れてもみ込み、10分おく。
2.ビーマンは種とワタ部分を取り除き、細切りにする。水煮タケノコはさっと湯通ししておく。
3.フライパンにごま油を熱し、ビーマンとたけのこを中火で炒める。少し塩コショウをかける。炒めたら取り出しておく。
4.肉をフライパンで炒め、ひっくり返した後野菜も入れて炒め合わせる。
5.オイスターソース、醤油、みりん、砂糖を入れて一気に炒めたら完成。

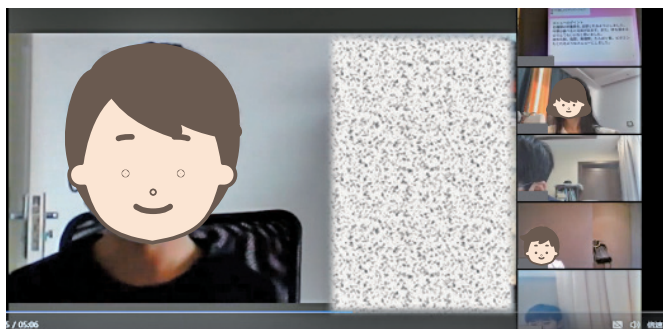
児童が考えた料理の作り方

児童が考えたメニュー

食べて欲しいシチュエーション
昼

メニューのポイント
五種類の栄養素を、全部とれるようにしました。
中華は食べると元気が出ます。また、体も温まるのでとてもいいなと思いました。
炭水化物、脂質、無機質、たんぱく質、ビタミンもとれるようなメニューにしました。

メニューを決めた理由



発表時の様子

8 考 察



成 果

- ブレット（ロイロノート）を活用し、視覚的情報を効果的に生かす方法について具体的に提示するなど、児童の実感を伴った指導を行うことができた。また、教師－児童間や児童同士の間で考えや思いを共有し、効果的な指導・交流につなげることができた。特に、相手に伝わりやすい語彙を考えさせる指導において非常に効果的であった。オンラインでも対面授業での指導に近い効果を上げることができた。
- 発表を聞く側の立場をイメージさせながら、ワークシートの記入内容を確認させながら発表準備を進めることで、伝わりやすさを意識させることに効果があった。
- ◆ 和食・中国料理にこだわらず、児童の経験してきた食生活からメニューを作成させることにより、それぞれの児童のルーツを大切にして学習を進めることができた。また、日本と中国の食文化への理解を深め、それぞれの良さに気づくきっかけにすることができた。

課 題

- ワークシートの内容は充実していたが、発表時にただ読み上げるだけになってしまった児童もいた。相手を意識したより効果的な表現について、更なる指導の充実が必要である。
- 情報量が多いところや、教科的な語彙は聞き流している様子もあったため、聴きとる側の指導・育成も必要であると感じた。

まとめ

本学級の児童は、日本語力の高さを生かし、効果的な発表活動に取り組むことができていた。日本語支援の二つの手立ては有効であったと考えている。しかし、より効果的な発表をして、全員がそれぞれの考えを深めるような発表・交流につなげていくためには、相手を意識して適切に伝えることができる表現力や考えを深めるために積極的に聴き取る力などについて、更に指導を充実させていく必要がある。

中学部

家庭と連携した言葉を広げる活動
(日本語力が十分ではない生徒への支援)

ICTで漢字マスター！

(タブレットを活用した家庭学習指導)

授業者 ● 北村 雅俊

1 ねらい

- 中学部において、日本語力が十分ではない生徒に対して、家庭学習を通じた個別支援を行い、漢字の読み（ひらがな表記と発音）や語彙に対する理解についての指導・支援を行う。

2 目標項目との関連

「読む」ステージ3（教科につながる初歩的な学習）

- b 「日常でよく使われる語彙（教科名、曜日、標識など）を読んで意味がわかる。」
- c 「学年より下の学習漢字が混じった短文を読んで大意を理解する。」

3 児童生徒の実態について

本校の中学部では、日本語力が非常に高い生徒が大半である。また、国際結婚家庭の生徒が8割を占め、日本語力と同様に、中国語の力も高い生徒が多い。しかし、中学部全体で数名の生徒には、日本語力が十分ではない様子が見られる。日本語の日常会話は問題ないものの日本語での読み書きが難しい生徒、日本語の会話や読み書きに時間を要する生徒、日本語での日常会話に大きな課題がある生徒などが在籍している。

しかし、本校の体制では在籍学級において授業の中で個別支援を行うことが難しく、取り出し指導も実施していない。

そこで、何度かの臨時休校によるオンライン授業を経て培ったICTの知識・技術を活用し、家庭学習で彼らを支援することにした。

4 日本語支援について

本校では、臨時休校の期間中、オンラインにて授業を行った。その際、課題・テストのやり取りや、授業中の児童生徒の見取り・つまずき把握のために、ロイロノートというアプリを活用した。このアプリは、教師が用意した PDF や画像などのデータを取り出し、書き込むことができる。また、書き込んだデータを教師とやり取りすることも非常に容易である。さらに、音声を録音してデータ化する機能がある。

日本語に課題のある生徒の支援においても、このロイロノートを活用し、家庭で学習したことを効果的な指導・支援につなげていくことが期待できる。また、対面・オンライン通話でより具体的に指導を行うことにより、取り出し指導と同等の指導・支援をすることができると考えた。

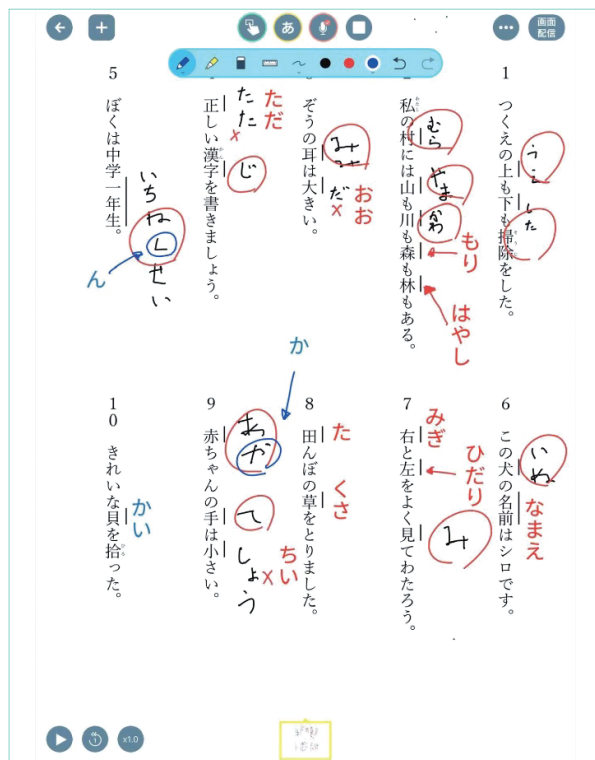
5 手順について

時数	学習活動	ポイント
		○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
準備 	● 教員は、教材を作成し、PDF データ化して学習の準備を行う。 ● 生徒・家庭（保護者）は、タブレットなど必要な ICT 機器の準備を行う。	○ 問題集などの教材を参考に、漢字の読み書きに関する教材を作成する。 ○ 生徒の実態と目的や活動内容について家庭（保護者）と共有し、家庭学習の指導ができる環境を整える。
家庭学習 	● 生徒は家庭学習として、自分の課題に合った教材を探して取り組む。（書き込みや録音など） ● 書き込みや録音のデータを指導する教員にオンライン（アプリ経由）で提出する。	◆ 生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、家庭（保護者）とこまめに連絡を取り、活動の様子や成果と課題について共有し、家庭と学校が一体になって生徒の成長を認め支えられるように配慮する。
指導 	● 教員は、提出されたデータを添削してオンラインで返送する。 ● 機会があれば、学校の休み時間や通話アプリなどの活用により、具体的な指導を行う。	◆ 生徒の努力や学習の成果を認め、前向きに取り組む姿勢を育てる。 ◆ 漢字の字体や言葉の使い方（中：風が大きい→日：風が強い）など、中国語との相違点・共通点についての気づきを共有する。 ◆ 中国語の知識を生徒が教師に伝える場面づくりなど、生徒が自信を持てるように配慮する。

6 資料



タブレット活用の様子
iPad とアップルペンシルを用いて添削・指導を行う



漢字の読みに関する自作問題
生徒は漢字の読みを記入し、音声を録音して提出する。教師は添削・指導を行う

7 考 察



成 果

- ◆ 個々の日本語の漢字・ひらがなの読み書きについて、つまずきの詳細を把握することができた。(下はその例)

- (i) 音読みと訓読みの区別が難しく、混同してしまう。
- (ii) 「東京」=ときょう、「弟」=おとなど、「う」の発音・読みが抜ける。
- (iii) 「学校」=がこう、「発達」=はたつ、など促音(「っ」)が抜ける。
- (iv) 「だ」や「が」などの濁点が抜ける。
- (v) 「か」と「カ」、「や」と「ヤ」など、ひらがなとカタカナを混同してしまう。
- (vi) 「鳥」=「鳥」、「会議」=「会议」など、中国語(簡体字)で書いてしまう。

上のようなつまずき(間違いの傾向)を具体的にアドバイスすることで、生徒たちの理解が深まると同時に、前向きに学習に取り組む意欲につながっていた。

- 読みについて「発音(発声)」と「表記」が同時に指導できるため、非常に効率的だった。
- ◆ 個々の困り感に寄り添うことができるため、生徒・保護者が学校・教員に支えられていることを実感し、信頼関係につながっていた。

課 題

- 対面・オンライン通話のように双方向の指導ができない場合、どうしても家庭学習と指導にタイムラグが生じてしまう。
- ◆ 家庭での ICT 環境(タブレットなどの機器・Wi-Fi の接続状況)が整わない場合、十分に指導することができない。

ま と め

以上のことから、日本語力が十分ではなく、漢字の読み書きに課題がある生徒にとって、ICT を活用した日本語の指導・支援は非常に有効な手立てであると考えられる。授業の中では支援が難しい部分を補って必要な指導ができるだけでなく、生徒の学習意欲・自己肯定感を高める側面からもメリットが多いからである。

また、本校ではタブレットなどの必要な機器の貸し出しなど、家庭の ICT 環境を補い生徒たちに必要な支援ができるように努力を重ねてきた。臨時休校によるオンライン授業の実践を経て、支援を必要とする生徒・家庭へのニーズに応える手立てをとってきた。

ただ、時間に限りなく指導できることはメリットもある反面、生徒・教員の大きな負担にもつながる可能性がある。メリットを最大限に生かせるような体制・ルール作りが必要になっていくと考えられる。

端午節について理解を深めよう

～中国と日本の文化・風習の違いと共通点～

授業者 ● 塚田 志保

1 活動の目標

- (1) 中国の言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と中国語との音声の違い等に気付くとともに、中国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ。—— **知識・技能**
- (2) 端午節の学習を通して、中国の言語や文化の理解を深め、中国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。—— **思考・判断・表現**
- (3) 中国の言語やその背景にある生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気づき、相手に配慮しながらコミュニケーションをとろうとする姿勢を育てる。—— **主体的に学習に取り組む態度**

2 バイカルチャラルの資質育成との関連

中国の言語や文化についての学習を通し、多様な価値観に触れさせると同時に、これらの良さを認め受容しつつ、自身の考えや思いを適切に伝える手立てを学ぶ。

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子7名の合計13名である。国際結婚家庭が約6割と、中国にルーツを持つ多数の児童が在籍している。家庭では中国語を主たる言語としている児童が多く、数名の児童には日本語の力には課題が見られる。反面、中国での生活が長く、日本での生活経験がほとんどない児童もいるため、中国語の能力は高く、生活や習慣、行事などの知識が豊富である。一方では、国際結婚家庭ではない児童は、中国語を生活で用いることがあまりなく、中国での生活経験があまりないため、中国の言語や文化の知識に大きな差が見られる。

学級には互いを尊重し、支え合う雰囲気があふれている。中国語に関する知識や経験に差があるからこそ、児童たちは学習を通して多様な価値観にふれ、それぞれを認

め合う体験につなげることができると考えている。

本活動を通して、児童がそれぞれの良さを発揮し、全ての児童がバイカルチュラルの資質を育てるきっかけとしたいと考えている。

4 活動について

本校では、英語の時間とは別に、全校児童生徒が週に一時間「中国文化と中国語」を学ぶ時間を設定している。小学部においては、小学校学習指導要領の「外国語活動」の方針に基づき、各学級で学習に取り組んでいる。本校の中国語担当教員及び担任に加え、現地の高等学校からの外部講師を加えた3人体制で指導を行っている。

本活動では、中国の「端午節」についての学習を通して、中国語の言語・文化への理解を深める。また、日本における「端午の節句」との比較を通して、日中双方の文化の特徴について肯定的に捉えさせることを目指している。そのことを通して、児童たちに様々な価値観にふれて、それを受け入れた上で、自分自身の生き方・ルーツを考えるきっかけにしたいと考えている。特に、国際結婚家庭の児童には、中国の言語や文化の知識や経験があることを肯定的に捉え、将来国際社会の中で活躍できることにつながる自己肯定感を育みたいと考えている。

5 活動構成（総時数3時間）

時数	学習活動	ポイント
		○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第1時	「中国の端午節の由来や特徴を知ろう」 ● 関連する言葉を練習し、歌を歌う。 ● 中国の端午節の祝い方を知る。 ● 粽（ちまき）の種類を知り、好きな粽の具などについて、教員や友人とインタビューしあう。	◆ 中国を主たる言語としている児童が活躍する機会を大切にする。 ◆ 身近な生活と関連付けて、中国の文化について理解を深める。
第2時	「端午節と龍の関係を知ろう」 ● ドラゴンボートレースの動画を観て、端午節との関連を知る。 ● 端午節に関連した龍の飾りの工作に取り組む。	◆ 国際結婚家庭の児童の知識や経験を生かし、学習が深めることで、自己肯定感の伸長を図る。 ◆ 工作を通して、中国の文化に親しみを感じさせる。
第3時	「中国の端午節と日本との端午の節句を比べよう」 ● 日本の端午の節句について知り、中国の端午節との共通点・相違点を交流する。	◆ 日中両国の文化の共通点・相違点を比較することを通して、日本と中国それぞれの価値観を捉え、多様な価値観を受け入れ認め合う資質育成のきっかけとする。

6 資料



現地校の先生を外部講師として招く



龍の飾りの工作

中国の「端午節」と日本の「端午の節句」を比べてみよう！

	中国の端午節	日本の端午の節句
いつ？	旧暦 5月5日	5月5日
食べるもの	ちまき(中国)	ちまき(日本) かきもち
かざるもの	香包	こいのぼり・五月人形などがと
子ども	額におさけで「王」とかく	ま
その他の習慣	ドラゴンボート しょうががよもぎの葉を家の間にかける。	しょうが湯(しょうがの葉を湯に入れた湯)
意味・思い	魔をけ、虫よけ、子どもを暑さや疫病 から守る。	子どもに健康かかを、そして

<メモ>

今日は、中国の端午節と日本の端午の節句のちがいをについて学んだ。
日本でもちまきを食やると知って おもしろかったです。

ワークシート日中の比較

7 考 察



成 果

- ◆ 日本から大連に来て中国のことを知らない児童、反対に中国の生活が長く日本の生活経験があまりない児童、双方にとって、日本と中国の文化の違いは新たな発見があり、新鮮な刺激を受けていた。
- ◆ 日本語の学校生活の中では中国ルーツの児童の生活経験や知識、言語の技能などを目にする機会はあまりないが、本活動を通してそれぞれの児童が友人の知らない一面を知ることができた。
- ◆ 日本語力に課題のある児童にとって、中国の知識や生活経験を生かして活躍する場面が多く、自信につながっている様子が見られた。

課 題

- ◆ 本学級は両親が日本人である家庭・児童のほうが少ない。本活動の中では、中国語を話すことができず、中国に関する知識が少ないことに対して、かえって自信をなくしてしまう場面も見られた。
- ◆ 中国にルーツがある国際結婚家庭の児童は、非常に積極的で得意なことに関して自信があふれていることが多い。それぞれの児童の自信と意欲を大切にしつつ、相手に配慮をしつつ考えや思いを伝えることができるように、適切なコミュニケーションを身につけさせる必要があると感じている。

まとめ

本活動の中で中国の端午節と日本の端午の節句を比較することを通して、日本と中国それぞれの伝統に根づいた価値観の違いに気づくきっかけとなった。また、日本から来た児童、中国の生活が長い児童、それぞれの良さを生かして有意義な交流を行うことができた。本活動の学びを生かして、今後の活動の中でさらに日中の価値観の共通点・相違点を比較し、最終的には多様な価値観を肯定的に受け入れる資質の育成につなげていきたいと考えている。

本学級では、日本ルーツと中国ルーツ、少数のほうで自信を喪失しやすい傾向が見られた。支援的な風土を最大限に生かし、日本と中国両国それぞれの良さに気づき、特徴を捉え能力・資質の育成に努めたいと考えている。

第1章 私たちと現代社会

第1節 現代社会の特色と私たち

授業者 ● 金野 教恵

1 単元目標

- (1) 現代社会の特色について理解を深め、資料から有用な情報を適切に選択し、活用することができる。 **知識・技能**
- (2) 現代社会の特色が現在と将来の政治、経済、国際関係に与える影響について多面的・多角的に考察し、表現することができる。 **思考・判断・表現**
- (3) 現代社会の特色に対する関心を高め、それに関わる課題を主体的に追究しようとしている。 **主体的に学習に取り組む態度**

2 バイカルチャラルの資質育成との関連

発展的な学習として、日本の学習指導要領に基づいて学習した内容について追究課題を設定し、中国の視点からも追究、考察したり、両国を比較、関連付けたりする活動を取り入れた。この活動を通し、多角的な視点からものごとを捉え、自分自身の考えを確立して、適切に表現する力の育成につなげていきたい。

3 児童生徒の実態について

本学級は、男子2名、女子1名、計3名である。積極的な生徒が多く、授業では活発な話し合いや発表が見られる。その一方で、資料を根拠として考察することや、複数の資料を比較・関連付けて考察することに課題が見られる。また、全員が国際結婚家庭の生徒であり、中国での滞在歴も長い。しかし、日本人学校では、日本国内と同様に日本の学習指導要領に基づき、学習を進めていくため、現地について学習する機会は少なく、地理的事象や歴史、政治等について知らない生徒が多い。そこで、中国への関心や理解を深め、国際感覚を磨くきっかけとするために、社会的事象を日本の視点からだけでなく、中国の視点からも追究、考察する活動を発展的な学習として設定した。学習を通し、学習指導要領にあ

る社会科の目標「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察」できるとともに、「国際社会に生きる平和で見ん素敵な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養」うことにつながると考え、授業を展開した。

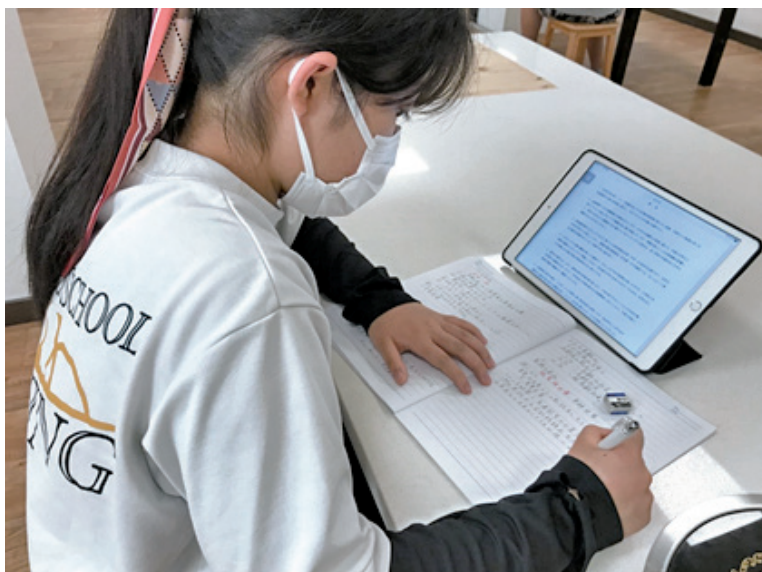
4 単元について

本単元は、学習指導要領の公民的分野「A 私たちと現代社会」の中項目「(1) 私たちが生きる現代社会と文化の特色」を受けて設定している。次の中項目「(2) 現代社会をとらえる見方や考え方」とともに公民的分野の導入として位置づけられている。現代社会の特色を理解するとともに、現代社会の見方・考え方の基礎となる枠組みについて、具体的な社会生活と関連付けながら理解し、以後の政治、経済、国際社会の学習の導入とすることを主なねらいとしている。また、教科書では主に、日本の視点から現代社会の特色や現代社会における文化について追究し、理解を深めていくように構成されている。中国について理解を深めるために、少子高齢化や情報化について、インターネットを用いて中国の現状について調べ、日本と比較する活動を発展的な学習として設定した。

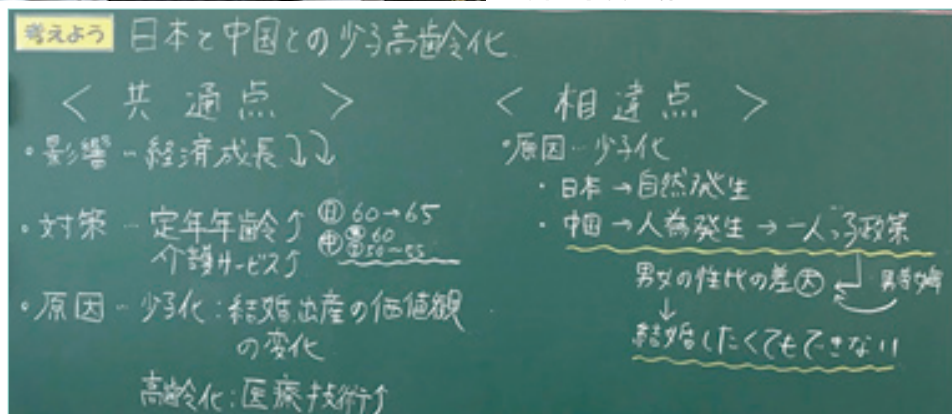
5 単元構成（総時数4時間）

時数	学習活動	ポイント
		○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第1時	「持続可能な社会に向けて」 ● 持続可能な社会の実現に必要なことについて、社会参画と関連付けて考察し、表現する。	
第2時	「グローバル化」 ● グローバル化の進展によって、社会や生活がどのように変化していきっているのか調べる。 ● グローバル化の進展によるメリット・デメリットを考察する。	◆ 小集団での学び合いを通し、グローバル化の進展による影響を捉える。
第3時	「少子高齢化」 ● 少子高齢化の原因や影響、対策について調べ、日本と中国の共通点と相違点を考察する。	◆ 中国の少子高齢化の原因や影響、対策について調べる。 ◆ 調べたことをもとに、既習事項である日本と比較し、少子高齢化について、両国の共通点と相違点を考察する。
第4時	● 情報化の進んだ背景や情報化の進展に伴う変化について調べ、日本と中国との共通点と相違点を考察する。	◆ 中国の情報化の進んだ背景や情報化の進展に伴う変化について調べる。 ◆ 調べたことをもとに、既習事項である日本と比較し、情報化について、両国の共通点と相違点を考察する。

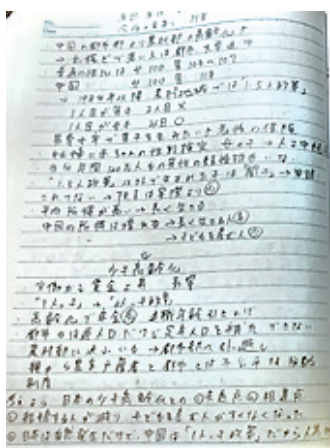
6 資料



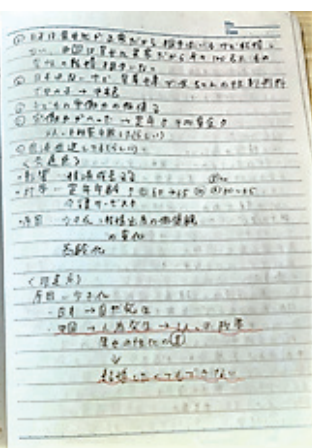
調べ学習の様子



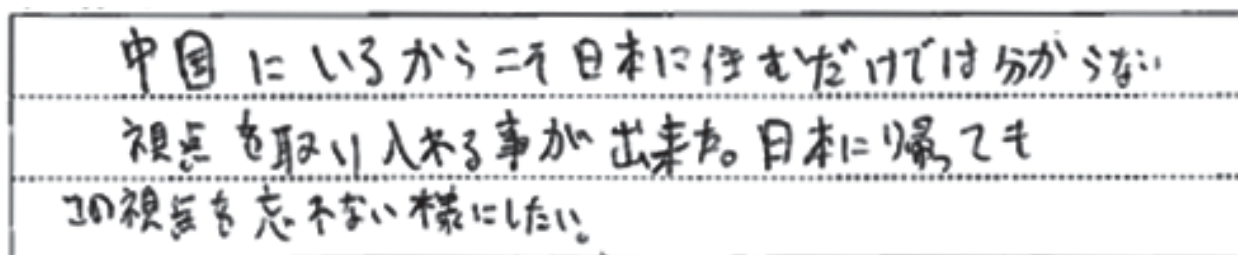
板書による整理・共有



生徒のノート



話し合い活動の様子



生徒の振り返り

7 考 察



成 果

- ◆ 社会的事象を日本の視点からだけではなく、中国の視点からも調べ、日本と比較することで、中国と日本との繋がりを実感したり、理解を深めたりすることにつながった。
- ◆ 探究活動では、教科書や資料集だけでなく、インターネットを活用して行った。中国語に堪能な生徒は、中国語で書かれたサイト等を活用して調査を進めたり、他の生徒に教えたりしていた。語学力を生かすことで自己肯定感や自信を高めることができた。
- ◆ 少子高齢化の原因や情報化が進んだ背景について、日本と中国の相違点として、国の政治体制の違いがあげられた。特に少子高齢化については、日本や中国がそれぞれどのような対応をしているのか社会福祉制度の違いについて新たな疑問も出てきた。今回の学習を通して、中国と日本の両国の社会的事象について関心を高めることにつながった。また、今回出てきた疑問については、この後の学習内容である「B私たちと経済」の中項目「(2) 国民の生活と政府の役割」や「C私たちと政治」の中項目「(2) 民主政治と政治参加」を学習した際に取り上げることで、両国の国のしくみや政治等の違いについて、理解を深めることができた。

課 題

- ◆ 追究活動を行っていく際に、資料の収集の難しさがある。情報規制により、日本のサイトの制限があり、思うように情報収集ができない。また、中国語は話せるが読み書きができない生徒もあり、現地の資料を活用する上で難しさがあった。
- ◆ 今後も生徒たちの生活圏である中国について理解を深めていくためには、社会科だけではなく、他教科と連携するなど、継続して学びの場を設定していくことが必要であると考える。

まとめ

本活動を通して、社会的事象を日本の視点からだけではなく、中国の視点からも追究、考察することで、社会的事象を多面的・多角的にとらえるとともに、中国への関心や理解も深めることができた。生活圏である中国について理解を深めることで、バイカルチュラルの資質の育成につなげることができたと思う。

【参考文献】 言語学習とは何か 教科学習に必要な言語学習 バトラー後藤裕子著
(算数における抽象的な専門語の指導や数学思考過程の言語化にける用語の厳密な使い方において参考とした)



バイカルチュラルの資質の育成

自他の良さに気づき、周囲とよりよい 人間関係を築くためのトレーニング

(コミュニケーションスキル・ソーシャルスキルを育むトレーニング)

授業者 ● 北村 雅俊

1 活動名

「自他の良さに気づき、周囲とよりよい人間関係を築くためのトレーニング」
(コミュニケーションスキル・ソーシャルスキルを育むトレーニング)

2 活動の目標

- (1) 多様なトレーニングを通し、自身や友人の性格・特性についての理解を深め、自他の良さに気づかせる。
- (2) 多様なトレーニングを通し、他者意識を高めてよりよい人間関係を築くとともに、適切に伝える力を育む。
- (3) 様々な価値観に触れさせ、それらを受容した上で自身の考えや思いをしっかりと持ち、自他を尊重する姿勢を育てる。

3 バイカルチュラルの資質育成との関連

多様な価値観に触れさせると同時に、それらの良さを認め受容しつつ、自身の考えや思いを適切に伝える手立てを学ぶ。自他の良さに気づき、よりよい人間関係を築く手立てを学び、自身の良さを発揮する資質を育てる。

4 児童生徒の実態について

中学部は、第1学年が9名（男子6名、女子2名）、第2学年が11名（男子6名、女子5名）、第3学年が2名（男子1名、女子1名）で、生徒の総数は22名である。

約9割が国際結婚家庭であり、長く大連に住んでいる生徒は約6割である。入れ替わりが激しいと言われる在外教育施設において、小学部低学年から本校に在籍している生徒が多く、落ち着いた学習規律や他者を温かく受け入れる支援的な雰囲気など、本校の良さの土台となって活躍している。ただ一方で、日本で生活した経験が少ない生徒も多いことから、様々な生徒の生活経験や考え・価値観を交流することで、多様な価値観にふれ受け入れる資質育成のきっかけにしたいと考えている。

本校の中学部は、全体的に日本語力が非常に高い。また、国際結婚家庭の生徒の大半は、高いレベルで日本語と中国語両方の言語を話すことができる。しかし、数名の生徒は日本語力が十分ではなく、日本語の日常会話は問題ないものの日本語での読み書きが難しい生徒、日本語の会話や読み書きに時間を要する生徒、日本語での日常会話に大きな課題がある生徒などが在籍している。

小学部から長年一緒に過ごしてきている生徒が多いため、学年に関わりなく非常に仲が良い。ただ、互いによく知っていて、言葉にしなくても伝わる環境だからこそ、相手の立場や思いをイメージしてコミュニケーションをとる力や、適切な言葉を選んで考えや思いを伝える表現力などの必要性を実感させ、育んでいくことが重要である。

つまり、本校の生徒たちが国際社会の中で良さを十分に発揮するためには、受容する力と同様、適切に表現する力や、どのような環境でもよりよい人間関係を築く力が必要だと考えられる。

5 活動について

本活動では、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルなどのトレーニングに取り組む。自分や友人の性格や特性について理解を深め、自他の良さに気づくことで、他者の良さを受け入れつつ、自身の良さに自信を抱くきっかけにしたい。他者を受け入れる受容性に磨きをかけつつ、自己肯定感を高めることにより、国際社会の中で良さを発揮するために必要な資質が磨かれると考えている。

また、コミュニケーションの手立てを学ぶことは、言葉を適切に選んで伝える表現力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力、他者意識を大切にして話したり聞いたりする力など、日本語支援にも大きく関連していると考えられる。

最後に、自身の考えや思いを適切に伝える手立てやよりよい人間関係を築く手立てを学び、総合的な学習の時間など実際に様々な交流の場で活用する経験を通して、近い将来社会生活の中でそれぞれの良さを発揮していくことにつながっていくと考えている。

6 活動構成（総時数6時間）

時数	学習活動	ポイント ○日本語支援の視点 ◆バイカルチュラルの視点
第1時	「傾聴」 ● 積極的に聴く手立てについて、ロールプレイなどを通し、実感させながら理解を深める。 ● 話し手を意識し、よりよい人間関係を築く手立てを理解させる。	◆ 話し手の気持ちをイメージしながら聴くことで、よりよい人間関係を築く手立てとその効果の理解を深める。
第2時	「エゴグラム」 ● エゴグラムに取り組み、自分自身の性格や特性について振り返る。 ● 友人との交流を通して、自他の違いについて理解を深める。	◆ 友人との交流の中で、他者との違いを理解し受容する資質を育てる。 ◆ 自身の特性を肯定的に捉えさせ、良さと課題に気づかせる。
第3時	「プラスのストローク」 ● 相手に温かい言葉をかけることの有用性を、ロールプレイなどを通して、実感とともに学ぶ。 ● 態度や声かけが、自身の評価につながることを理解する。	◆ 相手を意識して声かけをすることで、よりよい人間関係を築くことができ、自身の良さを発揮することにつながることを実感させる。
第4時	「怒りの温度計」 ● 自身の怒りの傾向をつかみ、適切に対処するアンガーマネジメントについて学ぶ。 ● 交流を通し、人はそれぞれ価値観・思いが違うことを実感する。	◆ 自身の性格や特性について振り返り、理解を深めさせる。 ◆ 他者との違いに気づかせ、相手の気持ちや考えをイメージして接することの有効性を捉えさせる。
第5時	「他者理解『砂漠の救助』」 ● 砂漠で遭難したという想定で討論を行い、価値観の違いを学ぶとともに、合意形成の手立てとポイントを捉える。	◆ 人によって価値観が違うことを理解させる。 ◆ 価値観が異なる集団の中で、合意形成の手立てと必要性を捉えさせる。
第6時	「上手な断り方」 ● ロールプレイに取り組み、相手を受容しつつ人間関係を壊さずに断る手立てについて学ぶ。 ● 自分の身を守るためにも断固として断る必要があることを学ぶ。	◆ よりよい人間関係を築きつつ、しっかりと主張する資質を育てる。 ◆ 社会生活では、断固として主張しなければならないケースがあることを理解させる。



他教科、日常生活への関連

◆総合的な学習の時間

本校の中学部の総合的な学習の時間では、以下のような外部との交流の機会がある。

「職場体験（中１）」「修学旅行（中２）」「JICA 出前授業（中３）」
「職場訪問（全学年）」「キャリア教育講演会（全学年）」「現地校交流（全学年）」
「日本の中学校との交流（令和２年度は全学年、令和３年度は１～２学年）」
「総合的な学習の時間発表会」

在大連の日系企業の大きな支援を受け、各企業への訪問や講演会の設定を実施している。

令和２年度からは日本国内の中学校とのオンラインでの交流を行っている。

（令和２年度・北海道北見市立高栄中学校 令和３年度・秋田県秋田市立山王中学校）

また、現地校に出向き、授業参観や部活動交流などを行う活動も実施している。

これらの交流の中で、トレーニングで学んだことを実際に活用する場面を設定している。

総合的な学習の時間発表会では、保護者やこれまでお世話になった企業の方々を招き、自身のテーマに沿って探究したことを、生徒全員がそれぞれ発表する。

◆日常生活

運動会や中学部合唱など、学校の教育活動の中でトレーニングの成果が生かせるよう、年間行事予定と関連付けて活動を計画・実施する。そのことによって、学んだことを実際に活用する機会が生まれ、確かな理解と定着につながっている。



トレーニング「上手な断り方」
ソーシャルスキル・人間関係



トレーニング「砂漠の救助」
他者意識と合意形成

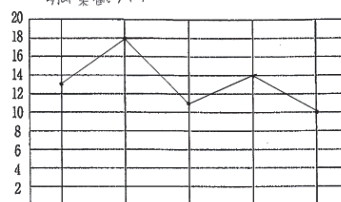
あてはまる	→ 2
どちらの場合もある	→ 1
あてはまらない	→ 0

氏名

											合計	
1	4	5	16	21	26	31	36	41	46	0	13	CP
2	7	12	17	22	27	32	37	42	47	1	18	NF
3	8	13	18	23	28	33	38	43	48	0	14	A
4	9	14	19	24	29	34	39	44	49	1	19	FO
5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	1	10	AC

グラフに記入をしよう!

明郎掌鏡タイフ*



	CP	NP	A	FC	AC	合計
現在	13	19	11	14	10	66
理想	14	16	15	14	15	74

エゴグラムのワーク

「怒りの温度計」

2年 (

自分は、どんなときに「怒り」を感じるだろうか。それぞれの場合に感じる怒りについて、その怒りを温度に表してみよう。

怒りの温度 100℃	「怒り」が発生する場合 ・最低な態度で接してこられたとき ・大事なことを言ったのに、無視されたとき
80℃	・自分の悪口を言われたとき ・嫌なうやめを流されたとき
60℃	・人の話を聞かないとき ・集中させてくれないとき ・なんにも他人任せにされたとき
40℃	・変なあだ名で呼ばれること ・急に呼ばれること ・うるさいとき ・性格のミスマッチを言われたとき
10℃	・いらん事を感ずる、 やや怒りを感じる、 でもまだ静か

「怒り」が発生した場合の対処方法

冷静¹²
静か¹² 軽蔑
怒⁵す, 理由を聞く
スト¹² / 反¹² / 散¹² 卓球

ワークシート「怒りの温度計」

8 考 察



成 果

- ◆ 伝え合うことの大切さや必要性を実感し、しっかりと話し合うことや、適切な声かけを大切にする姿勢が育ってきた。また、学校行事等で小学部の児童への接し方も、学びが活かされている場面を見ることができた。
- ◆ 様々な価値観があることを理解し、受け入れた上で適切に主張できる生徒が育ってきている。生徒同士の間では自分の思いを丁寧に説明しようとする場面が増えた。
- ◆ 自分自身を前向きに振り返ることで、自己肯定感を高める生徒が増えた。特に、中国ルーツの生徒は、日中両方の価値観を理解していることに自信を深める様子が見られた。

課 題

- ◆ 成果を数値化・可視化する手立てがあまりなく、生徒の変容を見取ることが主たる評価になっている。
- ◆ 本活動と他教科・領域での教育実践と関連付け、より効果的な日本語支援・バイカルチュラルの資質育成につなげていく余地が十分にあると考えられる。
- ◆ 本校を卒業した生徒が、学んだことをどのように生かしているか、評価や検証を継続する手立てが必要である。

まとめ

本活動を通して、本校の生徒たちの良さである支援的風土や受容性を更に豊かにすると同時に、生徒たちの課題である「表現する力」の改善にもつながった。特に、コミュニケーションの手立てを具体的に学ぶことが、生徒たちの自信や意欲を高めるなど、大きな成果があったと考えている。また、コミュニケーションの手立てを学ぶ中で、言葉を適切に選んで表現する力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力など、日本語力の育成につなげることができたと感じている。

さらに、本活動の中で様々な価値観を受容することが、他教科などの学習活動で日中両者の特徴を肯定的に捉える生徒の増加につながったと考えている。

ただ、本活動の評価は数値化・視覚化することが難しく、その手立てを確立していくことは大きな課題である。併せて、本校を卒業した生徒たちの活躍と学びの関連を検証する手立ても考えていかななくてはならない。

まとめ

本校は、学校全体で「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」を目指し、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語指導プログラム開発に取り組んできました。本校が実践研究を通して見出した成果と課題について、以下のように考察をまとめました。

成 果

● 学校の体制づくりについて

校長のリーダーシップのもと、全教員で目標を共有して実践を積み重ねる学校体制を構築することができました。AG5 担当を校内コーディネーターとして機能させることで、臨時休校・オンライン授業の時期も、それぞれの実践を交流して共有することができました。また、校内主題研究と連携することで、効率よく研究を進めることができました。

● 全教員での共通理解について

「共通のものさし」として「DLA 語彙チェック」や「JSL 評価参照枠」・「目標項目」を活用することにより、各学年の発達段階や各学級の実態・課題を全教員が共有して実践に取り組むことができました。また、各学年の発達段階や課題を把握し、本校の日本語指導について9年間の教育実践を構造図としてまとめることができました。

● 表現活動を柱とする日本語指導について

各教科の授業の中で表現活動を中心とした日本語指導を行うことで、児童生徒の学習意欲を引き出し、高めながら効果的な教育実践を積み重ねることができました。また、本校の強みである子どもたちの支援的な風土を最大限に生かし、認め合い学び合う学習環境の中での表現活動を通して、日本語力が十分ではない児童生徒への効果的な日本語支援につなげることができました。

● バイカルチュラルの資質育成について

本校では中学部を中心に「様々な価値観を受け入れ、その上で自分自身の考えを確立し、適切に主張することができる資質」の育成を目指し、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルのトレーニングを行いました。その中で、それぞれの児童生徒が自身の良さに気づき、資質の基盤となる「自己肯定感」を高めることができました。さらに、言葉を適切に選んで表現する力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力など、社会生活の中で生きる日本語力の育成につなげることができました。

また、大連・中国での生活経験を生かし、日中の比較（共通点・相違点）を行う学習を通して、多様な価値観を受け入れつつ自身の考えを深める資質育成のための大きなきっかけとすることができました。

課 題

● 見取り・評価について

今年度の教育実践を通して、児童生徒がどのように変容したか、見取りや評価が教育実践の継続につながると考えられます。本校では、学年（学級）全体として「目標項目」の活用、配慮を要する児童生徒については「個別の指導計画」が見取り・評価の主たる手立てとなっています。今後はさらに、数値化・視覚化をしやすいより客観的な見取り・評価の手立てを模索していくことが、さらなる実践の充実につながると考えています。

さらに、本校を巣立っていった子どもたちが、どのように学びを生かし、どのように活躍しているか、その検証の手立てについても、今後の大きな課題です。

● 教育実践の継続性について

在外教育施設は教員の入れ替わりが激しいため、教育実践の継続は非常に大きな課題であると考えられます。もちろん教育実践を記録として残すことも重要ですが、児童生徒の実態・課題を捉えて共有する手立て、さらに課題改善のために教員が目標を共有する手立てが、必要不可欠です。多くの教員が入れ替わってもそれらのことが実施できる学校体制づくりについて模索を続けていきたいと考えています。

今後に向けて

教員も児童生徒も大きく入れ替わることが多い在外の教育施設において、長い間在籍する国際結婚家庭の児童生徒が中核になり、新しく加わる児童生徒や教員を温かく迎え、支援的な風土を創り上げていることは、本校の貴重な宝物です。

教育実践を重ねてきた結果として、中国ルーツ・日本ルーツ関係なく、本校では多様な価値観を受け入れつつ適切な表現をしようとする児童生徒が育ってきています。学校中に笑顔があふれている光景、生き生きと学習に取り組む子どもたちの様子が、そのことを実感させてくれます。

今後も、教員も子どもたちも、人は大きく入れ替わってもさらなる発展を遂げたいと考えています。本校の挑戦は続きます。

また、この冊子発刊により3年間の成果をしっかりと伝えることができますこと、少しでも他校の先生方の参考になりますことを期待しています。

研究代表 佐藤 郡衛（明治大学 特任教授）
研究担当 近田 由紀子（目白大学 専任講師）
研究委員 中村 雅治（公益財団法人海外子女教育振興財団 相談役）

大連日本人学校 教員一覧

校 長 平良 亮
前 校 長 伊藤 千秋

教 頭 久保田 純子
前 教 頭 平良 裕樹

事 務 長 溝上 房枝

（教諭・順不同）

赤地 由衣
浅野 万里菜
安藤 久美子
池須 安希
石倉 右理
梅垣 美里
菊地 博之
北村 雅俊
小池 浩雄

小林 真由美
金野 教恵
崎田 真宏
佐藤 和彦
佐藤 静子
佐藤 哲也
谷垣 諒
塚田 志保
芳賀 貴明

濱崎 渚
百武 由里子
藤村 義之
馬 寧
松本 智子
馬淵 奈央人
横山 諒

表現活動を通じた日本語支援・バイカルチャラルの資質育成 ～大連日本人学校の実践から～

2022 年 3 月

編著者 ● 在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業
AG5 運営指導委員

発行者 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団
理事長 綿引 宏行

連絡先 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団内
AG5事務局
〒105-0002
東京都港区愛宕一丁目3番4号
愛宕東洋ビル6階
E-MAIL：ag5@joes.or.jp
TEL：03-4330-1351
FAX：03-4330-1355

印刷所 ● 株式会社トック企画



公益財団法人 海外子女教育振興財団
Japan Overseas Educational Services